

图 359 22号墳 出土遺物

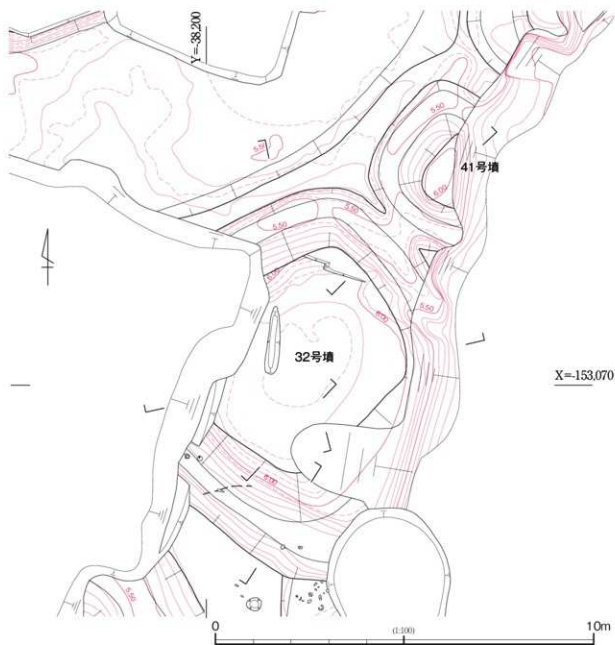


图 360 32号墳・41号墳 平面

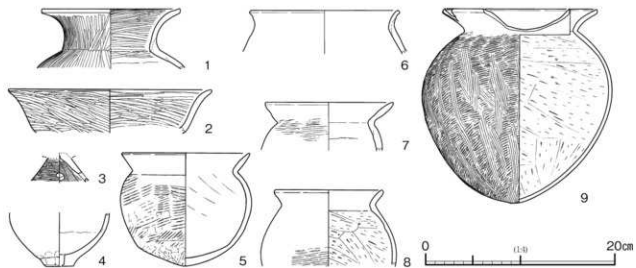


图 361 32号墳 出土遺物

41号墳 調査区の中央付近、22号墳の南東に位置する（図360、図版115）。墳墓の東半が攪乱により消失しており、全形は不明であるが、一辺約2.3mの方形墳丘を有する小墳墓と考える。墳丘には基盤層と盛土の一部が残るのみである。周溝は断面がU字状を呈し、幅約1m、深さ約65cmを測る。埋土は墳丘の崩落土であり、上面に土壌化層の形成は認められない（図362）。

周溝の切り合い関係から、32号墳に先行することは明らかである。埋葬施設や遺物が見つからず、規模が非常に小さい点も気になるが、このような場所で四周に溝の巡る高まりが存在すれば、墳墓と想定することが妥当であると判断した。

32号墳 22号墳の南側、X = -153.069、Y = -38.197.5付近に位置する（図360、図版118）。墳丘に調査区の境界が重なったものの、残存状態が良好ではないことから、そのまま調査を行った。東西の攪乱による影響で平面は歪な隅丸方形に変形し、南西北東約6.3m、南東北西約5.5mを測る。しかし、

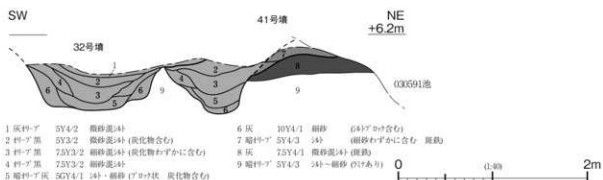


図 362 41号墳 断面

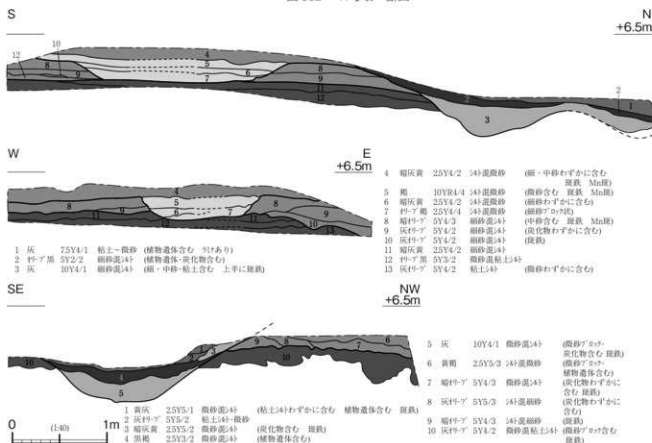


図 363 32号墳 断面

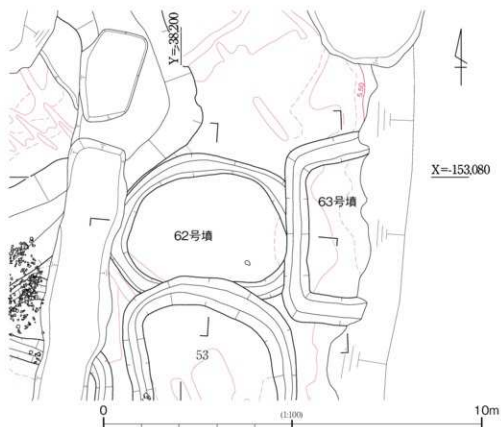
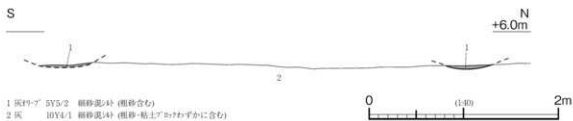
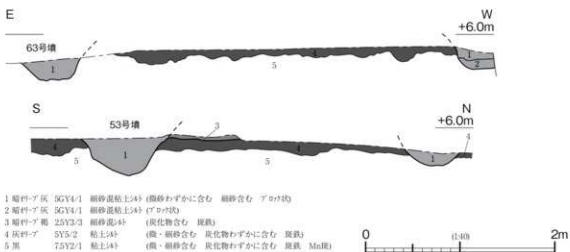


図 364 62号墳・63号墳 平面



- 1 灰サテ 5Y5/2 細砂混土(粗砂含む)
2 灰 10Y4/1 細砂混土(粗砂・粘土・アモルファスを含む)

図 365 63号墳 断面



- 1 灰サテ 灰 5GY4/1 細砂混粘土(粗砂わずかに含む 細砂含む アモルファス)
2 灰サテ 灰 5GY4/1 細砂混粘土(アモルファス)
3 灰サテ 灰 25Y3/3 細砂混土(炭化物含む 炭灰)
4 灰サテ 5Y5/2 粘土(炭・細砂含む 炭化物わずかに含む 炭灰)
5 黒 7.5Y2/1 粘土(炭・細砂含む 炭化物わずかに含む 炭灰 Mo炭)

図 366 62号墳 断面

墳丘内部の残りは良好であり、下面には最大3つに分かれる第5-2層や、覆土を含む4つの盛土層を確認することができた(図363)。

周溝は幅約1.5m、深さ40~60cmを測り、墳丘からの崩落土により埋没する。上面には土壌化による第5-1層が形成される。埋葬施設は墳丘のほぼ中央に位置し、墓坑の上端幅約1.25m、同長約2.25m、深さ約23cmを測る。内部から遺骸や遺物はまったく出土しなかった。



図367 53号墳 平面 出土遺物

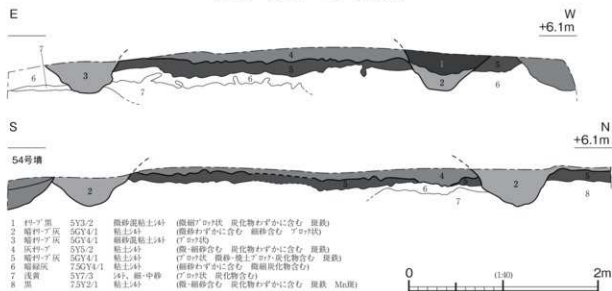


図368 53号墳 断面

- | | | | | |
|---|-------|----------|----------|---------------------------|
| 1 | 砂-ア層 | 5Y3/2 | 微砂混粘土(砂) | (微細アロケ状 炭化物わずかに含む 炭鉄) |
| 2 | 粘粉-ア灰 | 5GY4/1 | 粘土(砂) | (微砂わずかに含む 細砂含む アロケ状) |
| 3 | 粘粉-ア灰 | 5GY4/1 | 細砂混粘土(砂) | (アロケ状) |
| 4 | 灰粉-ア層 | 5Y5/2 | 粘土(砂) | (微-細砂含む 炭化物わずかに含む 炭鉄) |
| 5 | 粘粉-ア灰 | 5GY4/1 | 粘土(砂) | (アロケ状 微砂-炭土アロケ炭化物含む 炭鉄) |
| 6 | 粘粉-ア灰 | 7.5GY4/1 | 粘土(砂) | (細砂わずかに含む 微細炭化物含む) |
| 7 | 瓦質 | 5Y7/3 | 砂、細-中砂 | (アロケ状 炭化物含む) |
| 8 | 黒 | 7.5Y2/1 | 粘土(砂) | (微-細砂含む 炭化物わずかに含む 炭鉄 Mn鉄) |

遺物は南西周溝および南側外肩から出土した土器である（図361、図版411・412）。壺・高杯・小形器台・有孔鉢・甕が出土しており、7～9は外肩部からみつかった甕である。9は生駒西麓の胎土による庄内式甕であり、口縁に打ち欠きの痕跡が認められる。基本的には崩落土内の土器が墳墓に最も近いと考えられ、庄内式期古～中段階に築造されたと推測する。

63号墳 $X = -153.081$, $Y = -38.196$ 付近に位置する（図364、図版119）。墳墓の東半および墳丘を攪乱によって失っており、コ字状に残る周溝のみを確認した。検出時の周溝幅は約50cm、深さ約5cmであり、埋土は墳丘崩落土と思われる暗色土が残る。周溝から推測する墳丘は、一辺約3.5mの方形である。

62号墳 $X = -153.0815$, $Y = -38.199$ 付近、63号墳の西側に隣接する（図364、図版120）。長径約4.2m、短径約2.9mの歪な円形を呈する墳墓である。周溝は最大幅約60cm、深さ約20cmの断面U字形を呈し、墳丘崩落土により埋没したと考えられる。周溝の切り合い関係から、63・53号墳のいずれよりも先行して築造されたことは明らかである。なお、63・62号墳とも、埋葬施設や遺物の出土はみられ

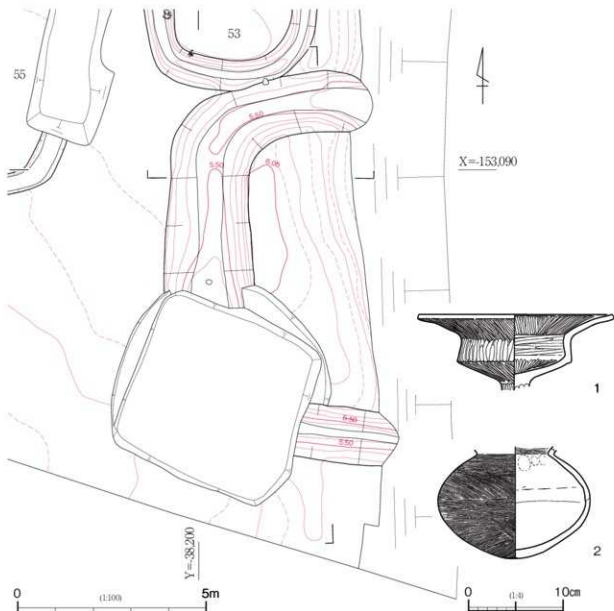


図369 54号墳 平面 出土遺物

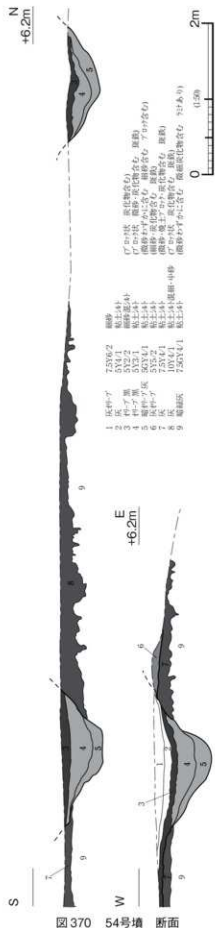


図370 54号墳 断面

なかった。

53号墳 $X = -153.085$, $Y = -38.199$ 付近、62号墳の南側に位置する(図367、図版121)。平面は南北約3.95m、東西約3.1mの変形した隅丸方形を呈する。墳丘の上部は削平されており、基盤層と1層の盛土を確認したのみである(図368)。

周溝は幅65cm~1.4m、深さ約35cmの断面U字形を呈する。墳丘からの崩落土により埋没したと考えられ、西側周溝では上部に土壌化の痕跡がみられる。周溝のわずかな切り合い関係から、南側の54号墳より先行したと推測される。

埋葬施設は確認できなかったものの、西側周溝から遺物が出土した(図367、図版412・413)。第V様式系甕や高杯等も出土したが、細片のため図化には至らなかった。1は手培形土器の覆部片であり、鳥様の線刻画が施されている。2は小形丸底鉢である。破片を含む全体からは、庄内式期中段階から新段階に築造されたものと考えられる。

54号墳 調査区中央の南寄り、 $X = -153.092$, $Y = -38.196$ 付近に位置する(図369、図版121)。墳墓の東半と南西部が攪乱により失われるものの、残存部分から、一辺約7.2mの墳丘規模を持つ隅丸方形の墳墓であることが明らかとなった。

墳丘は基盤層の途中まで削平されており、南側を中心に第5-2層が穿うじて検出できる(図370)。周溝は、断面形が緩やかな鉢状を呈し、基底面を基準として幅約1.8m、深さ55~70cmを測る。埋土は自然堆積物ではない均質な土砂であることから、墳丘の崩落土と考えられる。いずれの周溝においても、上面は土壌化により第5-1層と化している。西側周溝は墳丘の崩落土によって完全に埋没しなかったようであり、土壌化層の上部に第4層の氾濫堆積物が認められる。

埋葬施設に関しては、墳丘の大部分を失っていることもあり、周溝外を含めて一切検出できなかった。

遺物の大半は周溝の埋土から出た。内容としては、第V様式系甕・直口壺・高杯・鉢等が挙げられるものの、ほとんどは細片のために図化には至らず、形状の捉えられる一部のみを図示した(図369、図版412)。1は有段高杯の杯部、2は細かいミガキ調整を施す直口壺と思われる体部片である。出土土器の様相から、本墳墓は庄内式期中新段階に比定することができる。

55号墳 $X = -153.085$, $Y = -38.199$ 付近に位置し、49号墳の南東に隣接する(図371、図版122)。墳墓の北東部は操車場の攪乱により削り取られてしまい、また、墳丘も後世の耕作に伴う

攪拌によりほとんどが失われている。墳丘の平面は隅丸の長方形を呈しており、長辺が約5.4 m、短辺が約4.1 mを測る。墳丘としては、基盤層上に盛土の残滓を検出したのみである（図372）。

周溝は、幅約70cm、深さ約30cmの断面形が鉢状を呈し、墳丘の四周を巡る。埋土は、西・南側では3層に分かれるものの、いずれも土壌化層を含む均質なブロック土であり、本来の墳丘から崩落した土砂と考えられる。最も残存状態の良い西側では、周溝外から続く土壌化層が同埋土上に達し、墳丘盛土にすり付く様子が看取される。このことから、第5-1層形成時にはすでに周溝は埋没し、一方、墳丘

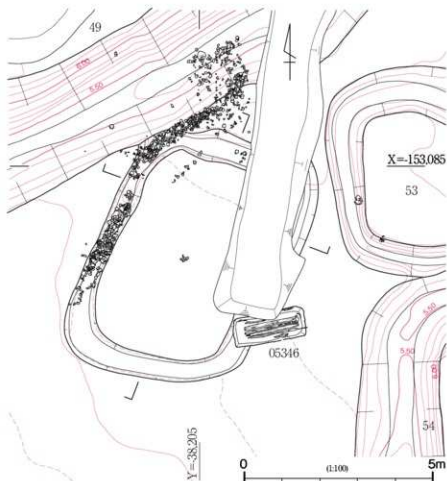


図 371 55号墳 平面

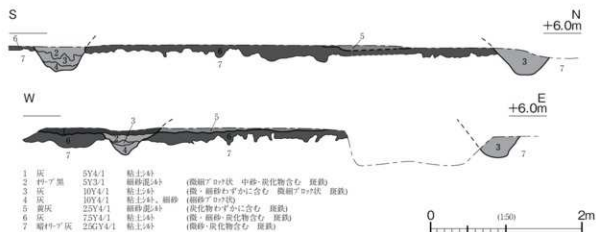


図 372 55号墳 断面

盛土は残存していた可能性の高いことが明らかとなった。

埋葬施設については、墳丘が著しく削平されたためか、痕跡すら確認できなかった。しかし、墳丘外において、周溝の南東部に木棺墓1基を検出した。墳墓との位置関係から、副次的な埋葬施設であった可能性を考えられるものの、ここではあえて単独の遺構とした。詳細については後述する。



図 373 55号墳 遺物出土状況

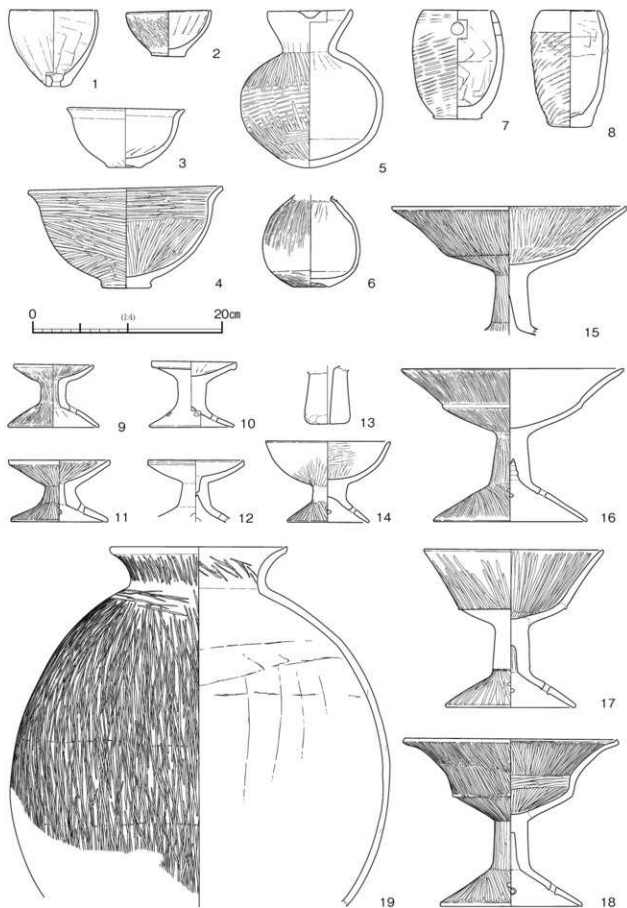


图 374 55号墳 出土遺物 (1)

遺物としては、西側周溝を中心に墳墓の北側にかけて大量の土器が出土した(図373)。土器は周溝埋土の上半から出土しており、周溝の掘削当初に投棄されたものではないことがわかった。このような大量の土器が出土する例は他に34号墳や52号墳があり、出土点数としては本墳墓郡内で本例が最多である。土器の出土状況のうち、西側については周溝に一致するものの、北側は周溝外へとのびて49号墳周溝内に散乱する。遺物の出土状況と周溝の平面形は一致しないが、攪乱の東側に周溝の続きが確認されたことから、平面形の誤認はないものと考えられる。出土した土器の多くが、周溝埋土の中位にみられることから、周溝の形状を意識せずに土器の供献を行ったものかもしれない。その場合、55号墳に供伴する遺物かどうかという疑問が発生するものの、隣接する49号墳には別途に供献土器が存在することから、本墳墓に最も関連深いものとした。ただし、北側の散乱する遺物については49号墳のものを含む可能性

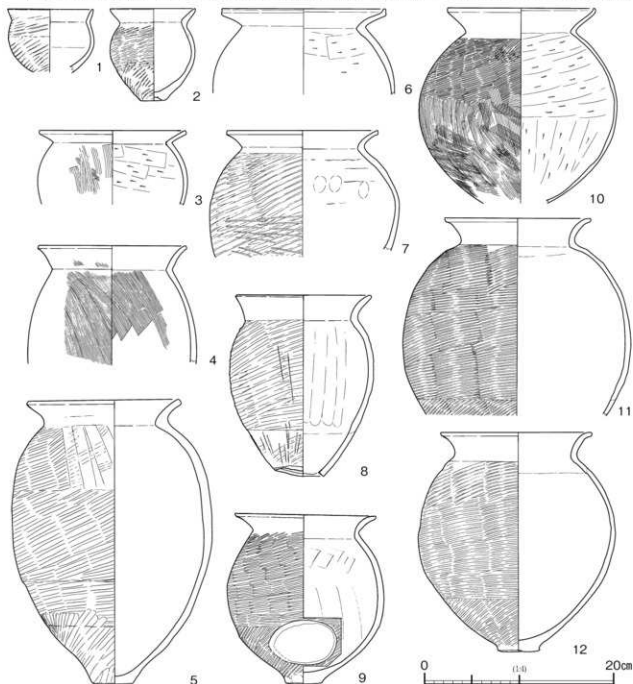


図375 55号墳 出土遺物(2)

が高く、注意を要する。

遺物には鉢・壺・器台・高杯・甕・蛸壺等がみられる(図374・375、図版413~417)。1~4の鉢は小型品や有孔鉢が含まれる。5は口縁に打ち欠きのある細頸直口壺、6は凹底を呈し、東海系瓢形と推測する。7は紐孔をもつ蛸壺であるが、8は無孔の場合、焼塩壺の可能性も考えられる。器台は小型品のみであり、脚部と受部との接合が貫通するしないの2種類がみられる。13は中空の円柱状を呈する不明品である。14~18の高杯には碗形・有稜であり、有段が揃う。甕の大半は粗い叩き目の第V様式系であるが、ハケ調整のものや庄内式甕、小型品も含まれる。図375-9は体部下半に焼成後の穿孔が認められる。大窓状を呈し、東海地方の影響を受けたものと思われる。これらの土器から、55号墳は庄内式期古段階以前に築造されたと考えられる。

05346木棺墓 X=-153.089.5、Y=-38.203付近、55号墳周溝の南東部に位置する(図371、図版123)。現地調査では、周溝の埋土上面において墓坑は確認されず、周溝および周辺の第5-2層の掘削後に検出したため、墳墓より先行する遺構として考えた。しかし、古い埋葬施設を破壊して墳墓を築造する例は当墳墓群ではみられず、当時そこに木棺墓が存在するという認識がなかったとは考え難いこと、また、55号墳の造墓が墳墓群の中でも古く位置付けられること等から、05346木棺墓は55号墳より後出する遺構であろうと訂正した。この場合、55号墳の副次的な埋葬施設であった可能性が高くなるものの、推測部分が多いため、通常の遺構として取り扱うことにした。なお、木棺墓はほとんど平坦な状態に検出したため、記録が平面図のみである。

墓坑は、残存長約1.9m、同幅75~80cmを測る隅丸長方形を呈する。木棺は全長約1.45m、幅約35cmを測り、スギ・ヒノキが使用される。木棺からやや外側にはみ出した北東隅にて頭蓋骨が出土したもの

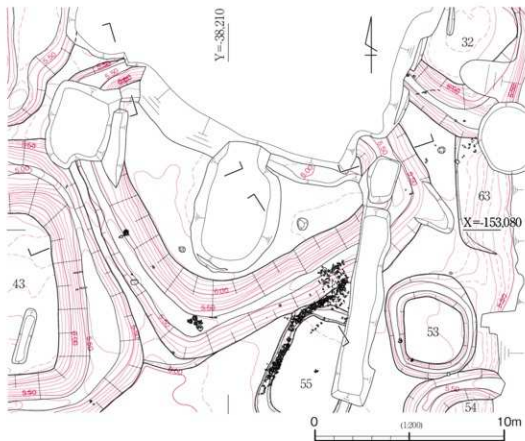


図376 49号墳 平面

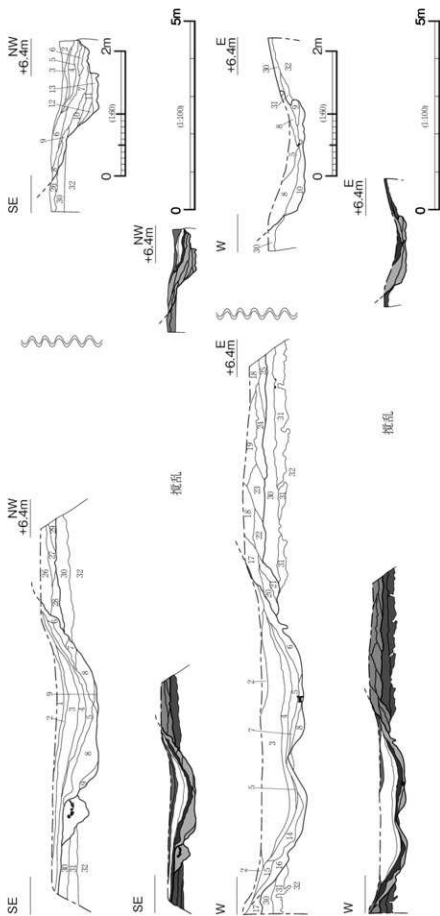


图 377 49号堤 断面

の、残存状態が不良のため詳細は不明である。頭骨の出土から、頭位は真北から約80°東に振っていたことがわかった。

49号墳 $X = -153.078$, $Y = -38.210$ 付近、22号墳の南側に位置する(図376、図版123・124)。墳墓の北東部をはじめとする多くが、操車場関連の攪乱によって消失する。しかし、北側と東側の周溝の一部を確認したことから、墳丘は南北約13m、東西約12mの隅丸方形を呈することが明らかとなった。

墳丘の上部は後世の耕作によって削平されており、下面において最大2つに分かれる基盤層と、盛土層の一部を確認した(図377)。本墳墓群の中では珍しく、盛土層が細かい単位に分かれる状況を看取した。また、盛土は上下2段に大別することが可能であり、上段は中・粗砂を多く含むのに対し、下段は細・中砂を主に含む。これは周溝の掘削において、深度が増す毎に排土である第5-2b層が次第に粗くなる状況と一致しており、周溝の掘削と墳丘への盛土という作業が連動したことを示している。また、本墳墓の場合、墳丘内の盛土の堆積方向から、土砂は墳丘の内側から外側に向かって盛り上げられたことが明らかとなった。

周溝の規模は、北・東側が攪乱により、西側が隣接する43号墳と共有するために正確ではないが、幅2.5m前後、深さ約50cmを測る鉢状の断面形を呈したと考えられる。南北方向の断面における周溝の切り合い関係から、49号墳が55号墳より後出することは明らかである。一方の東西方向では、43号墳との間に共有する微小な周溝肩部の検討から、現地では43号墳より後出すると判断した。しかし、再整理を行ってみると、先に43号墳の周溝が埋積した場合、その埋土表面の土壌化は49号墳より進行する可能性が高いはずであるが、実際は優劣の区別をつけられないことがわかった。

また、第5-1層が49号墳の周溝埋土と同様に収束する点により同墳墓の周溝と捉えたが、墳墓の築造が第5-1層形成時に下ることはないことが判明し、周溝肩部ではないと判断するに至った。遺物の型的な推測は別として、図面上では新旧の区別を行うことは困難であることから明示は行わず、見かけ上は並行したように表現する。

西側周溝の断面について、墳丘側面の基盤層が途切れる様子が見受けられる(図377)。墳丘法面の形状は、最終的な景観を示すものとして周溝底面から連続する埋土下面の層界を採用した。上記の基盤層の断絶は墳墓完成後の崩落とは考えにくく、築造当初に掘削された肩口と判断する。最終的な周溝斜面に一致しないことから、おそらく、墓坑構築までの一次造成と、埋葬施設の覆土から完成までの

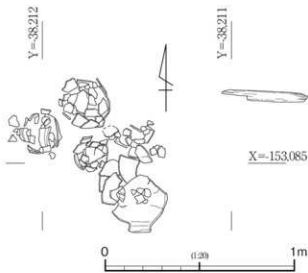


図378 49号墳 遺物出土状況(1)

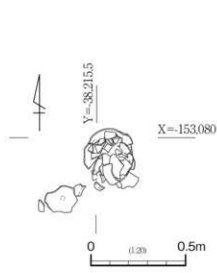


図379 49号墳 遺物出土状況(2)

二次造成との間に時間差が生じたため、その間に部分的な崩落が起こったものと推測する。再掘削は行わず、そのまま周溝の掘削と墳丘の盛土を行ったのであろう。墳墓築造の過程を考える上で、重要な示唆を与える資料となりうる。

埋葬施設については、墳丘の内外に関わらず残念ながら1基も確認できなかった。

遺物の大半は周溝内から出土した。しかし、遺物の点数は非常に少なく、出土状況は周溝内に点在する程度である(図378・379)。注目すべきは、確認し得た出土地点が西側周溝の中央、南側角、東側角であり、先述の55号墳出土遺物の周辺を含むと南側周溝の中央を加えた、周溝の各屈曲部と中間に位置すると考えられる点である。西側の周溝より出土した遺物は、弱い衝撃で破砕して散らばったか、あるいは個体のまま墳丘裾にて圧砕したようである。他の出土例によると、このような状態は墳丘上から転落した可能性が高く、上記のような出土地点の特徴から、墳丘上の四隅と各辺の中央に配置されたと推測できる。同様の出土例は22号墳であるが、後述するように当墳墓には二重口縁壺がまったく含まれておらず、直口壺や甕が主である。その点では既知の1号墳に近い傾向と言える。

上記の土器以外に特筆すべきものとして、西側周溝より出土した石皿・石杵・朱塊がある(図380)。朱塊については、調査終了後に行った蛍光X線分析により水銀朱であることが判明している。石皿と石杵は、周溝の外側法面の地山である第5-2b層に半ば埋まった状態で、対する墳丘側法面から朱塊が出土した。状況的に、第5-2b面の建物跡等に伴う遺物の可能性も考えられたが、周辺からは関連するような遺構が検出されず、同墳墓の遺物として扱うことにした。このような出土状況から、他の土器と同様に墳丘上から転落した可能性が考えられるものの、石皿の重量は約14.4kgに達しており、周溝の外側斜面まで転がるものか疑問を抱かざるを得ない。管見では、赤色顔料の道具と材料が、このような形で墳墓から出土した例を聞いたことはない。なお、出土した土器には朱の付着するものはみられなかった。失われた部分の土器か、あるいは埋葬施設に使用されたものであろう。

遺物は、土器に鉢・高杯・小形器台・壺・甕、石製品に石皿・石杵、木製品に板材がみつかった(図381・382、図版418~421)。図381-2は碗形の鉢であり、口縁部をヨコナデした後、浅い擬凹線を施す。6は横方向の細かいミガキ調整を施す有稜高杯片であるが、杯部内面に黒色の付着物が認めら

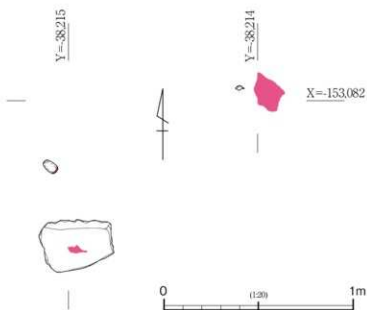


図380 49号墳 遺物出土状況(3)

れる。同様の黒色物質は壺の口縁内面に多くみられ、表面に光沢を帯びた油分の多いものを人為的に塗布したと推測するが、詳細は不明である。9は胎土が生駒西麓産であり、口縁端部を上方につまみ出す有段鉢である。12はわずかに平底傾向の残る複合口縁壺である。13のように丸底化した直口壺がある一方、14・15のようなミガキ調整を施す突出した平底の壺もみられる。図382-1~6は主要な甕であるが、図面とは異なり、構成比率的には第V様式系が9割を占め、庄内形が残り1割の大半、布留形は細片のみ、S字状口

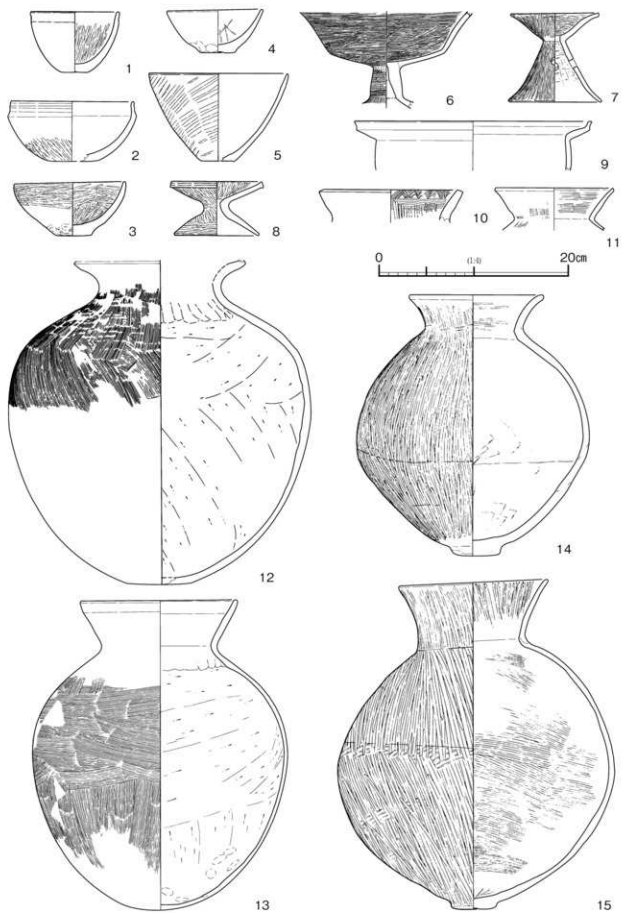


图381 49号墳 出土遺物(1)

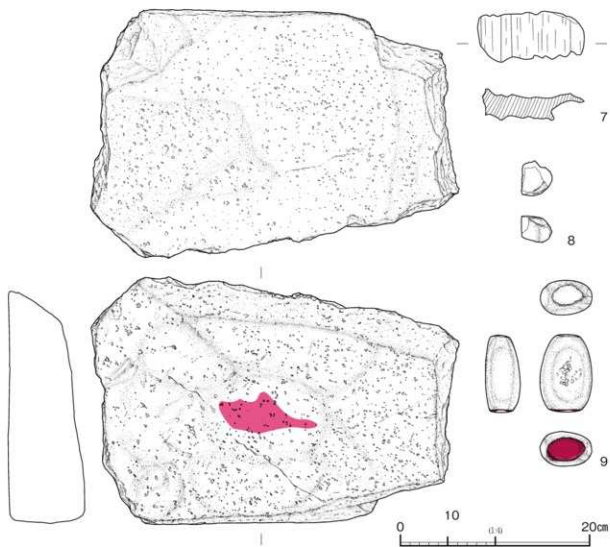
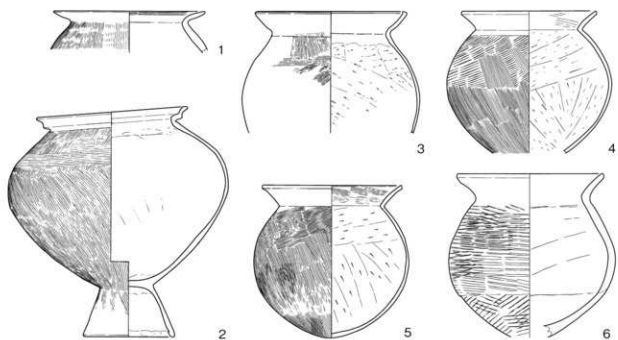


图 382 49号坑 出土遗物(2)

縁甕が1個体分となる。2のS字状口縁甕は口縁端部が失われたものの、体部はほぼ完形であった。胎土の違いや外底面の粗粒粘土の貼り付けは、東海からの搬入品であることを示しており、廻間Ⅱ～Ⅲ式のものと考えられる。7はコウヤマキ製の板材である。材質や形状から、木棺小口板であった可能性もある。8は流紋岩製で、おそらく摺石片と思われる。9は砂質ホルンフェルス製の石杵であり、鏡面状に磨かれた下面全体に水銀朱の付着が認められる。また表面には敲打痕が残っており、原材料の岩石を砕く際に付いたものであろう。10は安山岩製の石皿である。名称については、形状から皿と表現したものであり、通有の石臼と同義である。縦が約26.2cm、横が約38.9cm、重量は約14.4kgを測る。表面平坦面のほぼ全体に平滑化した使用痕が認められ、中央部の凹みに石杵や墳丘斜面と同質の水銀朱が付着する。土器から、49号墳は庄内式期新段階頃に比定できる。

46号墳 X = -153.068, Y = -38.227付近に位置する(図383、図版131)。墳墓の西側約3分の1が操車場による攪乱のために失われているものの、全体の形状や埋葬施設を確認することができた。墳丘の平面は隅丸方形を呈し、基底面での規模は、東西が復元で約11m、南北が約9.5mを測る。墳丘上部は削平されるものの、5つの盛土層と下面に3つの基盤層を確認した(図384)。

周溝は、断面形が椀状を呈しており、幅2.5～4.0m、深さ50～70cmを測る。南北方向の断面では、周溝底面に僅かな墳丘崩落土がみられるものの、直交する東側周溝では、底面に第5-1層が直接形成される。いずれも周溝が埋没したのは第4-1面であり、特に第4層の氾濫発生時までは確実に開口状

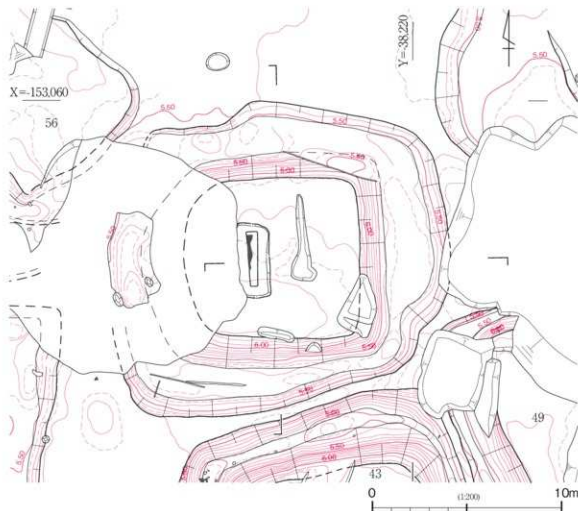


図383 46号墳 平面



図 384 46号堤 断面

態であったと考えられる。

埋葬施設としては、墳丘中央からやや西寄りの位置に主体部1基を検出した(図385)。墓坑は南北を主軸とする隅丸長方形を呈し、全長約4.0m、残存最大幅約1.65m、深さ約30cmを測る。埋土は2層を

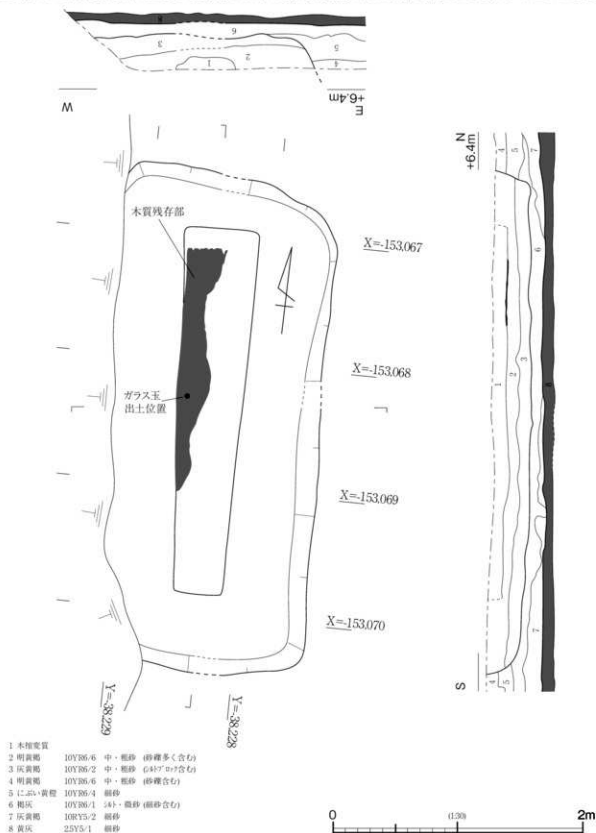


図385 46号墳主体部① 平・断面

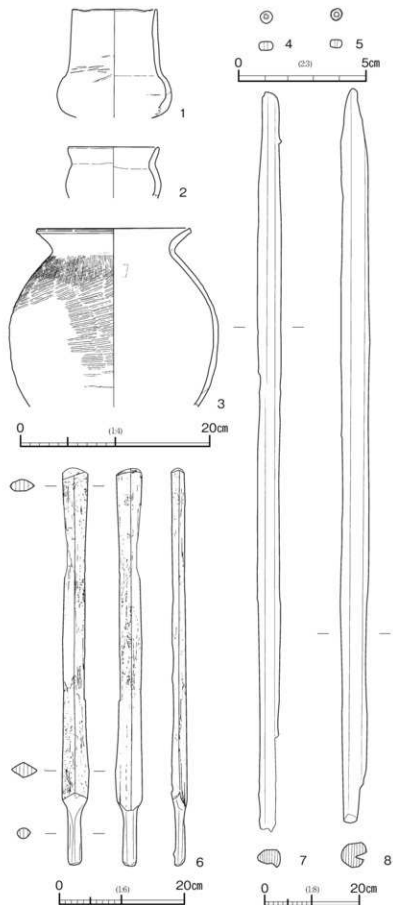


図386 46号墳 出土遺物

確認し、最上部の層1は木棺による変質部分である。

埋積状況によると、墓坑底面を整地土で均した後、棺床から木棺周囲の表込までを一息に行っており、設置されたのは組合式木棺で、墓坑構築と共に組み立てられたと推測される。木棺は、枡形に変質する部分の下面において、膜状に残存した木質を検出したのみである。変質部分の範囲は長さ約2.90m、幅39~56cmを測る。同範囲内から人骨はみつからなかったものの、幅の違いから北側が頭位であったと考えられ、真北から約2.5°西に振る。この変質部分の中央付近、やや西側の位置から、ガラス玉2点が出土した。当墳墓群において、棺内から副葬品が出土する例は稀有であり、出土位置が特定できる点で非常に貴重な資料となる。

遺物は主に周溝内から出土したものである(図386、図版422)。内容としては、土器に壺・鉢・高杯・器台・甕等がみられ、他に木製品や玉類が認められる。1は口縁がほぼ垂直にのびる長頸壺である。甕は3と同様の粗いタタキ目の残る第V様式系甕の破片が普遍的にみられる。しかし、図示したものは墳丘下面からの出土土器であり、墳墓築造の下限を表すものとして掲載した。高杯は脚部が多数出土するものの、上下が伴わないため、図示するには至らなかった。概観する限りでは、中実の棒状脚部と、小型で盃形に伴う脚部が多く出土する。4・5は主体部①から出土したガラス製小玉である。直径は4が約5.5mm、5が約4.5mm

である。いずれも酸化銅により青く発色したカリガラスで製作されたものである。6は北側周溝付近から出土したスギの柁目材を用いた剣形木製品である。全長約65cmを測り、断面菱形を呈する刃部の表面は、被熱を受けて炭化しており、祭祀に使用されたのであろうか。7・8は、スギの割材を用いた棒状製品である。他に、全長が2.7m以上を測るものも共に出土した（図版422～写17）。7・8は全長が1.5m以上であり、端部を加工して尖らせることから、地面等に突き立てて使用したものと推測する。これらの遺物から、46号墳の築造は庄内式期新段階頃に比定できる。

43号墳 調査区やや西寄りの南側、 $X = -153.084$ 、 $Y = -38.224$ 付近に位置している（図387、図版125～128）。周囲には同じような規模の46・49号墳が隣接しており、やや離れた22・44号墳まで含むと、東側の小墳墓群に対する大型墳墓用の墓域と考えられなくもない。43号墳は、北側を46号墳、東側を49号墳の各辺と接するように配置されており、墳墓の築造が綿密な計画の下で行われたことを示唆するものであろうか。墳墓の平面形状はほとんど完全な状態で遺存するものの、墳丘上部は後世の耕作による削平を受けて埋葬施設が露頭し、その西側は操車場関連の掘削が南北に貫き、埋葬施設の一部は失われていた。

墳丘は、北東側がわずかに広がるものの、各辺が正方位に則った隅丸方形を呈し、南北8.5～9.5m、



図387 43号墳 平面

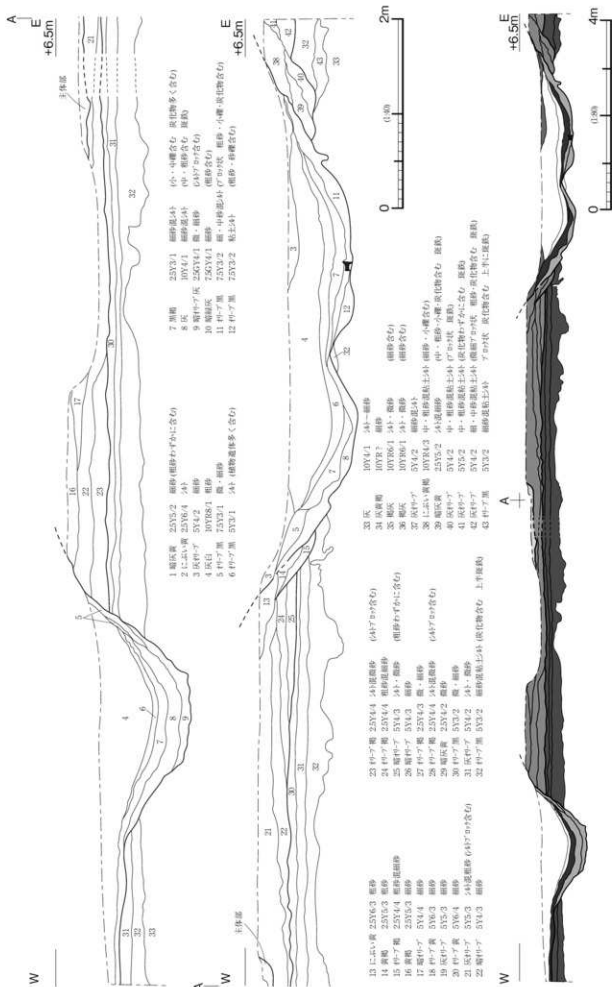


図388 43号堤断面(東西)

東西約11mを測る。一方、北側と東側の周溝外郭線は、隣接する墳墓の周溝と並行してそれぞれ北東と南東へと広がっており、墳丘平面とずれた景観を呈する。

墳丘高は残存部分にて最大約45cmを測り、下面では3つに分化した基盤層の第5-2層と、その上部に14層に分層可能な盛土を検出した(図388・389)。盛土は、基盤層に近い下部ではシルトや微砂が基本であるが、上部ではほとんど細砂のみとなり、周溝周辺の第5-2層から第5-2b層の土質に一致することから、周溝掘削の排土を利用したことが明らかである。また、墳丘の下部では周溝の肩口に細かい単位の盛土がみられることから、先に周溝の排土を使って墳丘縁辺に堤を巡らせ、次いでその内側、上方へと、盛土を行ったことがわかった。

周溝は、東側の外郭線が墳丘と並行しないため、場所によって数値に顕著な差が生じてしまう。周溝の幅は2.0～3.9m、深さは北・東が約65cm、南・西が約80cmを測る。周溝底面の標高が、東側以外はT.P.+5.0m前後とほぼ同一であり、地形的に高い西・南側の相対深度が大きくなったものである。しかし、基本的には空堀であった周溝において、このように標高を意識しながら掘削していたことがわかった。埋土としては、周溝の最下層に1～2の墳丘崩落土が堆積し、その上部に土壌化による第5-1層が形成される。しかし、これらの土砂は周溝を浅くした程度であり、堆積期間が短かったものと考えられる。第5-1層形成時には、周溝の形状が残っていたことは明らかであり、その後の第4層の氾濫堆積物により完全に埋没した。

埋葬施設としては、墳丘の中央付近において主体部1基を検出した(図390)。

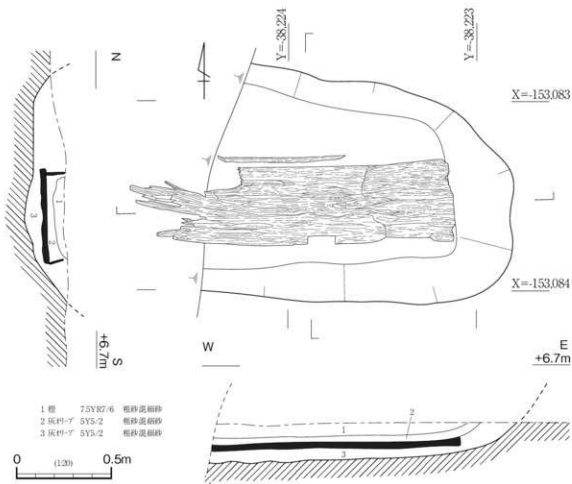


図390 43号墳 主体部① 平・断面

主体部①は、上部と西半を攪乱により消失する。墓坑はやや歪な隅丸方形を呈し、残存範囲の長さ約1.6m、幅1.02～1.23m、深さ約20cmを測る。墓坑は墳丘盛土の中心に構築されており、基盤層に達するような掘形等は作られていない。埋土の状態から、棺床用の土砂を整地した後、そのまま組合式木棺を組み立て、裏込めまで連続して作業を行ったことが明らかとなった。木棺は底板と僅かに残る側板が見つかった。底板はコウヤマキの板目材であり、幅約50cm、厚さ約3.5cmを測る。側板のうち、北側のものはスギの板目材を使用し、厚さ約2cmを測り、上部が腐朽しているため、高さは不明である。南北の両側板とも底板の側面に立った状態で出土したことから、これらが組合式木棺であることに間違いはない。棺内には小口側から侵入した土砂が堆積しており、遺物や人骨等は一切みつからなかった。このように人骨は遺存しておらず、木棺も寸断されているため、頭位を判断するには情報が不十分である。ところが、43号墳の南側にみつかった複数の木棺墓は、いずれも本墳墓の主体部①と主軸が一致しており、詳細は後述するが、すべて頭位が東側であることがわかった。

他の墳墓においても、隣接する埋葬施設が同一の頭位を示す例がみられることから、本例も同様になると考えられる。したがって、43号墳主体部①の頭位も東であり、方位は真北から約87.5°東に振っている。上記のとおり、主体部①以外に南周溝の外側において3基の木棺墓を検出した。しかし、43号墳に関連するものかどうかは不明であり、未確認ではあるが、別の墳墓の周溝となりうる落込みの端を検出したことから、本墳墓の副次的な埋葬施設とすることは避け、単独の遺構として後述することにした。

43号墳の遺物の大半は、周溝の埋土から出土したものである。盛土内にも多数の土器片が含まれるものの、図化に至るものは極めて僅かであった。また、周溝から出土した遺物のほとんどは、埋土の中の第5～1層上面においてみつかった(図391)。出土地点は北側と南側の周溝に集中しており、西側周溝では北西角を中心に遺物がみられるものの、東側では土器は皆無に等しかった。出土した土器はいずれも細片と化すものの、個体の状態に近いものが多く、転落して破砕したか、あるいは上部の堆積土により圧砕されたものと推測できる。

遺物としては、土器に小型品・二重口緑壺・鉢・高杯・壺・甕、木製品に棒状製品・梯子状等がみられる(図392・393・395、図版423～427)。1・3・4は横方向の細かいミガキを施す小形丸底土器であり、2の第V様式系甕の小型品とは一線を画する。5～7・11は横方向の細かいミガキを多用する二重口緑壺である。5は頸部から体部にかけての外表面と、口縁部内面に部分的な赤色顔料の付着が認められる。6は体部の中位付近に1カ所、焼成後の穿孔が認められる。7の底部外面には、焼成後に抉り取られた直径約1cmの凹みがみられる。これらについては、底部穿孔を認められない点が特徴的であ

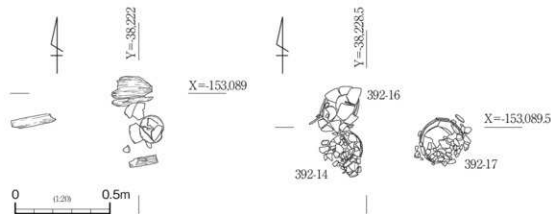


図391 43号墳 遺物出土状況

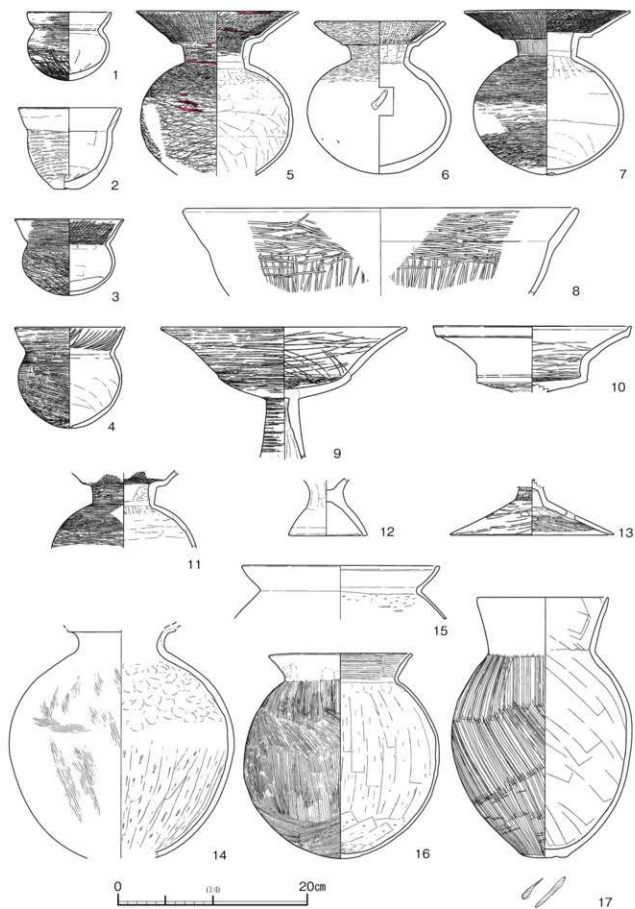


图 392 43号坑 出土遗物(1)

る。9・10・13のように有稜・有段・碗形高杯の3種があり、いずれも横方向の細かいミガキ調整を行う。12は墳丘下面から出土した脚台である。14は体部が球胴化した複合口縁壺である。17は板ナデ調整が顕著に残る平底の壺である。底面に2条の圧痕がみえる。16が周溝内から出土したほぼ完形の甕である。盛土は第V様式系甕が圧倒的に多く、周溝埋土の第5-1層としては、15のような布留式甕の破片も含まれる。同層は43号墳の築造後に形成されたものであるから、包含層としては当然のことであり、破片として出土する同様の遺物には注意を払わねばならない。ただし、墳墓の供献土器と考えられるものも、墳丘からの転落により第5-1層上に集中してみつまっていることから、両者を主観的には分別しないよう心掛けた。43号墳においては、完形あるいは残存状態の良好な土器を墳丘から転落した供献土器とし、それ以外の破片を包含層資料として便宜的に区別した。なお、総合的に検証ができるよう、特徴的なものについては両者の区別無く掲載することにした。

木製品については、周溝内から出土した棒状木製品と梯子状木製品を图示した。棒状木製品は南側周溝からみつかった10数本のうちの一部であり、先端部等に加工痕が認められる。图示したものはいずれもスギの割材を用い、長さ1m前後、幅5cm前後と法量の規格化が看取される。同様の棒状品の出土例は、本墳墓群では24・15号墳、既知では1号墳が挙げられる。規格は異なるものの、1ヶ所に集まる様

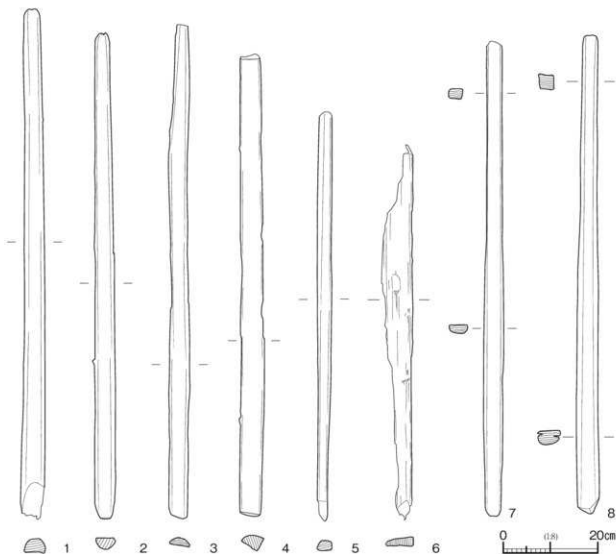


図393 43号墳 出土遺物(2)

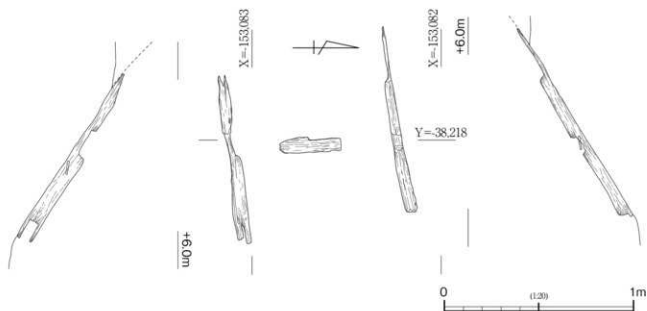


図394 43号墳 周溝出土木器製品 立面

子は1号墳に近似しており、墳丘上での祭祀に用いられた構造物の可能性があると考える。

本墳墓において、特筆すべき遺物として梯子状木製品がある(図394、図版426)。これらは、墳丘の東側斜面上に立て掛けた状態で検出した(図版127)。両側の枠はヒノキ・スギの割材を用い、南側(2)は1ヶ所、北側(3)は2ヶ所に入れた括りを外側に向けて置かれる。1段目の括りと同じ高さで、枠の内側からカシの柃目板(1)が

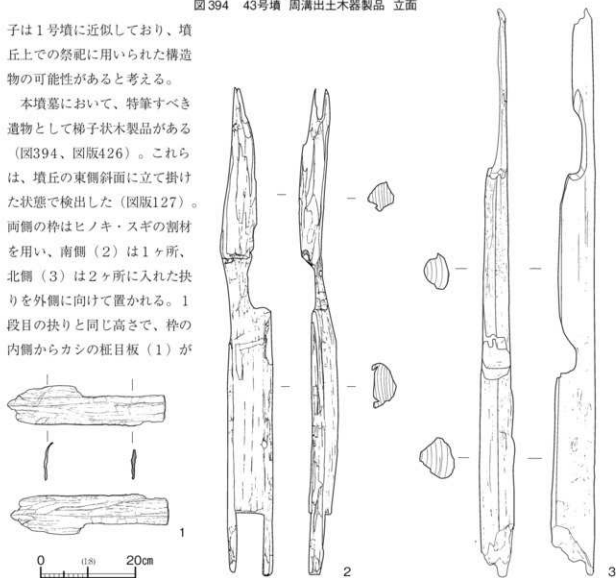


図395 43号墳 出土遺物(3)

みつかった。残存状態はあまり良好ではないが、出土状況から格の残片と判断した。枠の上端はいずれも腐朽が著しく、永く風雨に晒されていたと考えられる。推定する墳丘高から、本来は倍程の長さで5～6段の梯子であったと推測する。枠間の距離は約85cm、挟りの間隔は約42cmを測り、挟り毎に格が付けられたとすれば、現代の一般的な梯子の段間約35cmに比べると、かなり段差の広いものとなる。使い勝手からすると梯子ではない可能性もあり、その形状からは、犬ぞり風の轆・背負子・祭祀用の飾り枠等が考えられる。轆や背負子としては、遺物の腐朽が激しいために使用痕等の確認を行うことができず、判断できない。2の下端の挟りは梯子の形状に無関係なものであることから他の木製品の転用と考えられ、また挟りの加工や材の選定のように堅牢性を重視した作りであることから、祭祀用道具として考えることも難しい。本報告では、当初の想定通り、出土状況を最優先にして判断した梯子状木製品として捉えることにした。同種の出土例の増加に期待したい。

43号墳の南側から、3基の埋葬施設を検出した。西側の2基は43号墳と異なる落込みの中に位置する可能性が高いものの、詳細は不明である。東側の1基は平坦面に位置し、43号墳にもっとも近いことから、副埋葬であった可能性も考えられる。ここでは、それぞれ単独の遺構として報告することにする。

05345木棺墓 43号墳の南東、周溝際に位置する(図396、図版129)。第5-1層を除去すると、墓坑の輪郭と小口板の上端が露頭した。墓坑の平面は丸みを帯びた隅丸方形を呈し、規模は長さ約1.25m、幅約75cmを測る。断面形は凹凸のあるすり鉢状を呈し、深さが約30cmである。埋土として3層を検出し、最下層から順に整地土・棺床土・裏込土と考える。木棺は組合式箱形木棺であり、盖板を欠損する(図版428)。底板の上に小口板と側板を立てる。小口板は検出面より約5cm上方に突き出すのに対し、この時点では側板は露見していない。底板と小口板の使用材はヒノキであるが、側板は軽軟なスギを用いたため、腐朽の程度に差が生じたものと思われる。本来は小口板と同様の高さであったと考えられ、木棺の内

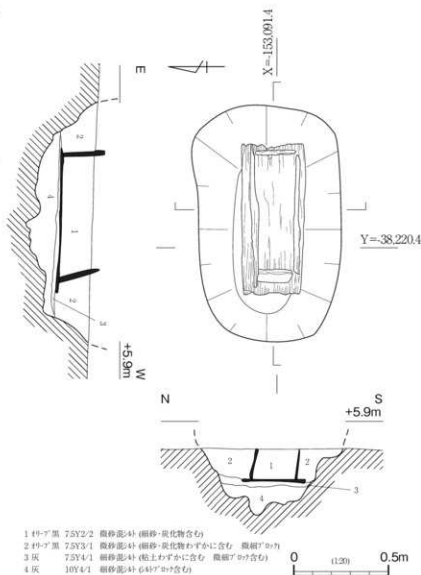


図396 05345木棺墓 平・断面

寸は長さ約64cm、幅約22cm、高さ約21cmとなる。蓋板はおそらく流失したと思われ、棺内に堆積する埋土が裏込土とほぼ同質であることから、蓋板を失った際に上部の覆土が流入したものと推測する。棺内に人骨等の残存は認められず、墓坑および周辺での遺物の出土も確認できなかった。木棺の寸法的には小児用と推測する。木棺東部における底板と棺の内寸幅がわずかに広いことから、頭位は東側と考えられ、方位はほぼ真東である。

05347木棺墓 43号墳の南側、05345木棺墓の西側に位置する(図397、図版130)。43号墳の南側において長さ約7.5mにわたる落込を検出し、その埋土の掘削中に木棺が露頭した。おそらく、落込の埋積途中に埋葬施設を設置したと思われるが、掘形の切込み面を確認できなかったため、正確な構築段階は不明である。

遺構の南側は01-2調査区との境界にあたり、断面観察用トレンチの掘削等により消失してしまった。墓坑は歪な楕円形を呈し、残存部の幅約30cm、長さ約1.0m、深さ約10cmである。木棺は蓋板・小口板・底板が残存するものの、側板は両側ともみつからなかった。蓋板は底板の上方に検出したが、スギの柾目材を使用したためか、著しく腐朽して薄片状態であった。小口板はヒノキの追根目材を使用し、底板外側の東西埋土に刺さった状態で見つかった。墓坑底面には直径10×15cm弱の小穴が掘削されており、小口板が突き立てられた状況を確認した。この型式の木棺は、本調査区では唯一の出土例である。板材の長さは約27cmであるが、底板から上方に突き出た部分は約11cmとなっている。底板はヒノキの板目材を使用し、長さ約66cm、幅約17cmを測る。縁辺に極端な腐朽の痕跡がみられないことから、当初から小口板との間隙は存在していたと考えられる。これを含む棺の内寸長は最大でも約76cmであり、小児用木

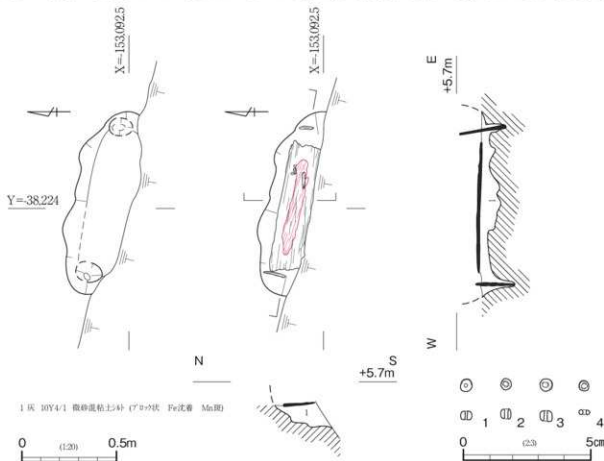


図397 05347木棺墓 平・断面 出土遺物

棺と推測する。

底板の上面東側から、歯片3点とガラス玉4点が出土した(図版130-2)。ガラス玉はいずれも直径5mm程に揃っており、酸化銅によって青く発色するカリガラスを使用することがわかった。

05363木棺墓 43号墳の南側でみつけた木棺墓の中では最も西に位置する(図398、図版130)。調査区境の第5層を掘削中に舟底形の木製品が露頭したため、当初は準構造造船の部材と考えた。しかし、内部から歯片が出土したことから、木棺であることが判明した。したがって掘形等は未確認である。北側の落込屑は後の調査で検出したものであるが、木棺の掘形の一部となる可能性がある。

木棺は蓋板・小口板・底板で構成された組合式を呈するが、樹種が古代船に多用されるクスノキであることから、船材を木棺に転用した可能性が高い。蓋板は残存長約1.28m、最大幅約64cm、高さ約12cm

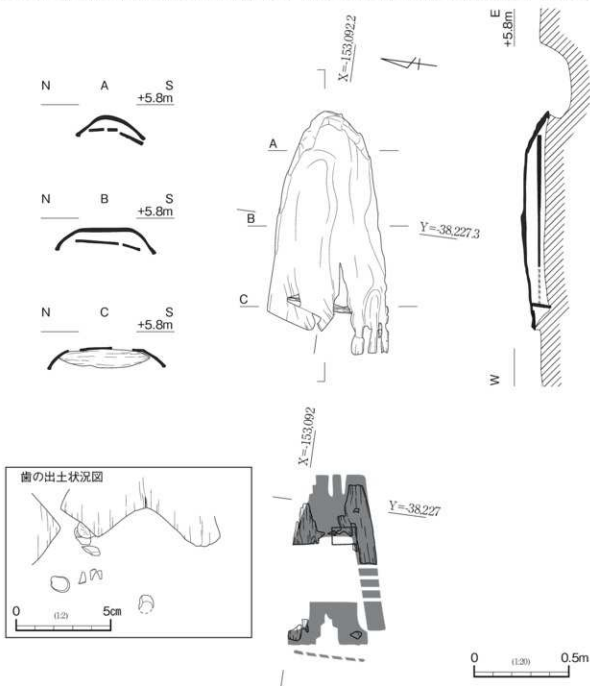


図398 05363木棺墓 平・断面 歯出土状況

の舟底形を呈し、底を上にして被せた状態と思われる。小口板は長さ約48cmの半月状を呈し、船尾側のみ、開口部を塞ぐように立てられる。底板は残存状態が良好ではなく、検出範囲をトーン表示したが、最終的には固化した木質のみが残った。

底板の中央よりやや船首側において歯片が出土し、鑑定によって被葬者は10才前後の小児であることがわかった（図版130-6）。この他に棺内から遺物は出土しなかった。船材を木棺に転用した可能性のあるものとしては既知の1号墳2号主体部があり、本例と共に特別な意味が込められたものと考えられる。歯片がやや船首側に位置することから、頭位はこれに一致すると思われ、方位は真北から約82°東に振る。

9号墳 調査区の北西、 $X = -153.028$ 、 $Y = -38.247.5$ に位置する（図399、図版132）。墳墓の南側に18号墳が隣接しており、周溝の一部を掘削する以外に目立った擾乱はみられない。ただし、墳丘の上部は、第4面以降の耕作に伴う攪拌により削平されており、墳丘の検出とはほぼ同時に埋葬施設が露頭した。墳丘は均整のとれた隅丸方形を呈し、基底面での規模は東西約5.9m、南北約5.3mを測る。墳

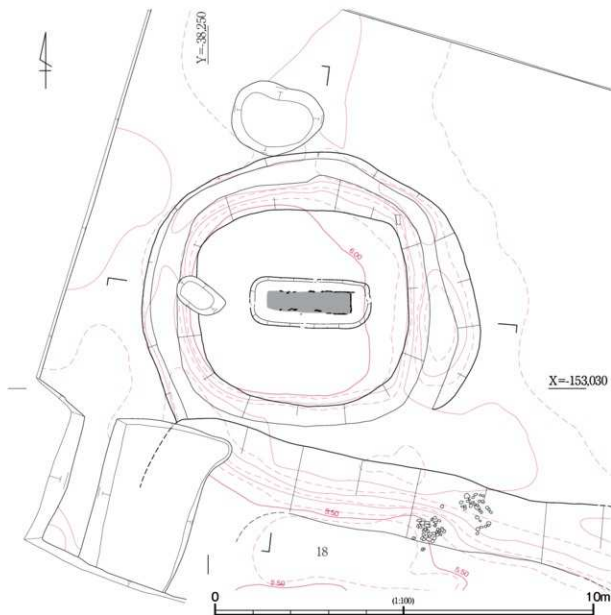


図399 9号墳 平面

丘の下面には基盤層である第5-2層が明瞭に残存しており、その上部に5層に分化する盛土を検出した(図400)。盛土層の断面では、積み上げ方法を想定できるような状況は看取できなかったが、埋葬施設の位置する墳丘の中央付近に薄い堆積層が確認された。層6は埋葬施設の掘形の埋土である可能性も考えられるものの、特に南北方向では後述する木棺の位置と大きな偏りがみられることから、盛土作業の工程上で現れた中央部の凹みと解釈する。

周溝については、南西部部分が18号墳により攪乱されるものの、全体的に南に向かって浅くなる状況が看取され、幅0.8~1.7m、深さ15~25cmを測る。埋土によると、周溝は墳丘からの崩落土により埋積が進行するものの、わずかに残った凹みに第4層の氾濫堆積物が流入して完全に埋没することがわかった。ただし、本墳墓より後出する18号墳の周溝では、埋土の底部付近に第5-1層の形成が認められることから、先に築造された9号墳の周溝埋土に第5-1層が検知されない点は違和感を覚える。

図400における層4は、土質の内容から墳丘の崩落土であることは間違いなく、その下層である層5は土色・質とも第5-1層に近似することから、同層に相当する可能性が高い。しかし、これは西側周溝でのみ確認された層であり、他の周溝では記録されていない。記録写真を再確認したところ、層4の下部に土色の濃い部分が僅かにみられることから、あるいは層界が不明瞭であったために分層されなかったものと思われる。その場合、周溝埋土としては18号墳との堆積状況に然程の違いがみられなくなり、築造の時期差はほとんど無くなることになる。

埋葬施設は墳丘のほぼ中央において、主体部1基を確認した(図401)。

墳丘検出時に木棺の輪郭が露頭したものの、それらは上部の大半を失った側板と小口板の残滓であり、底板はすでに腐朽して土壤に痕跡を残すのみであった。その痕跡から主体部①は組合式木棺であることが明らかとなり、木棺の規模は全長約2.2m、幅50~58cmを測る。若干幅が広いことから、東側に頭位があったと考えられ、方位は真北から約91.5°東に振る。

遺物の出土は非常に少なく、小型鉢・壺・甕・高杯を図示した(図402、図版425)。1は主体部①付近から出土

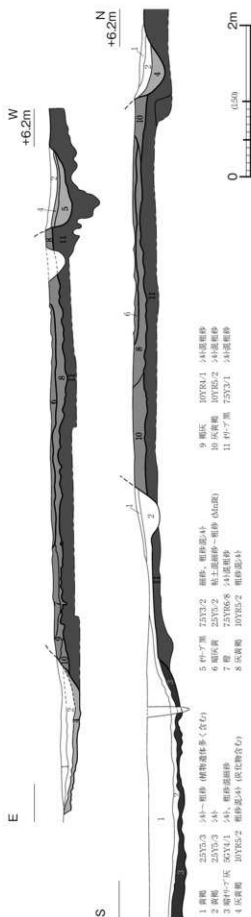


図400 9号墳 断面

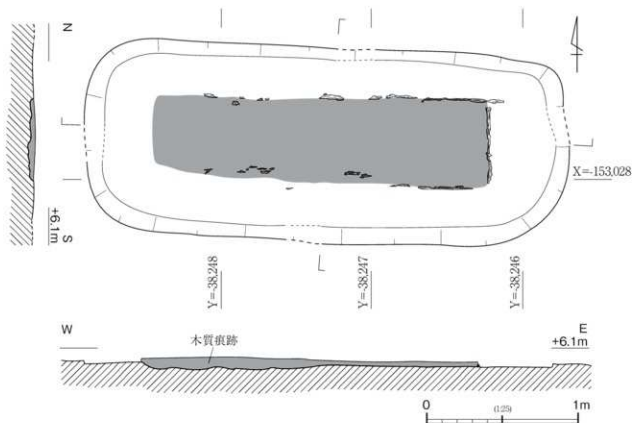


図401 9号墳主体部① 平・断面

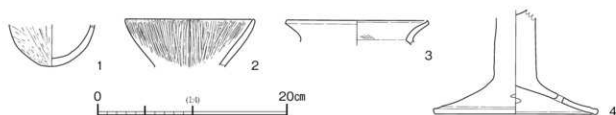


図402 9号墳 出土遺物

した鉢で、ケズリにより丸底化する。2～4は周溝から出土した土器であり、3は生駒西龍産の胎土をもつ庄内式甕である。4は18号墳周溝との重複部分から出土した高杯である。これらの土器から、9号墳は庄内式期新段階頃に築造されたと推測する。

37号墳 調査区の北西、 $X = -153,040$ 、 $Y = -38,234$ 付近に位置する(図403)。西側には18号墳が隣接しており、同墳墓の周溝と重複する西側周溝は消失している。第5-1層除去中に墳丘が検出されず、下面の調査において方形に巡る周溝を認知したことから、37号墳を設定したものである。第5-2層上に明確な盛土が残存していなかったことは明らかであり、後世の耕作等による攪乱で低墳丘部分を削平した可能性が高いと考える。

墳丘の平面は、隅丸の長方形を呈する。検出時点で基盤層の大半を除去していたため、墳丘裾部付近の規模ではあるが、長辺約9.6m、短辺約6.6mを測る。周溝も底部付近の規模ではあるが、幅0.9～2.0m、深さ約7～15cmを測り、おそらく当初は西側を含む墳丘の四周に周溝を巡らせていたと推測する(図404)。埋土は、墳丘の状態が不明であるために比較はできないものの、氾濫堆積物ではないことは明らかである。埋葬施設の検出、および遺物の出土はみられない。

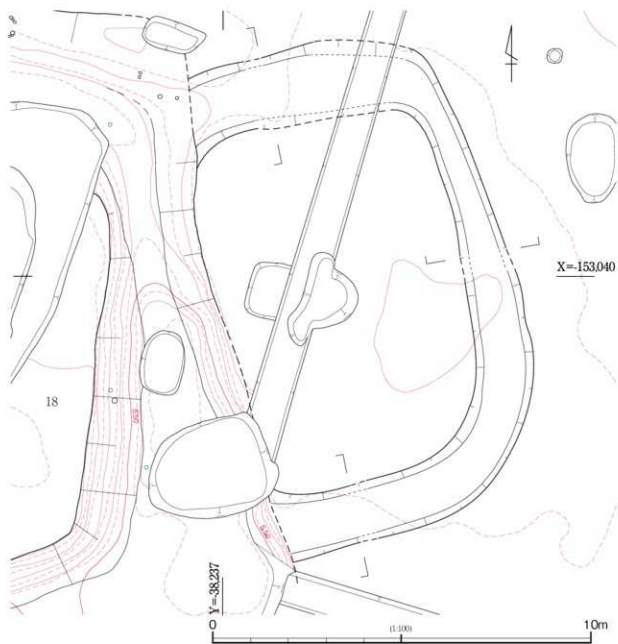
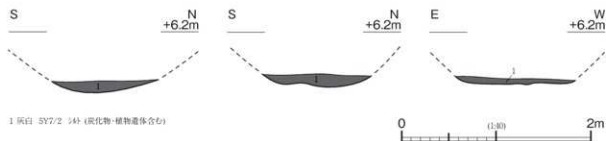


図 403 37号墳 平面



1 灰白 5Y7/2 5A (灰化物・植物遺体含む)

図 404 37号墳 断面

18号墳 調査区の北西、 $X = -153,042$ 、 $Y = -38,245$ 付近に位置する(図405、図版133)。北に9号墳、東に37号墳、南に20・21号墳が隣接し、この1群の中では最も大規模な墳墓となっている。操車場の攪乱により墳丘の北半を消失し、一部では変形も認められる。墳丘平面は隅丸方形を呈したと推測

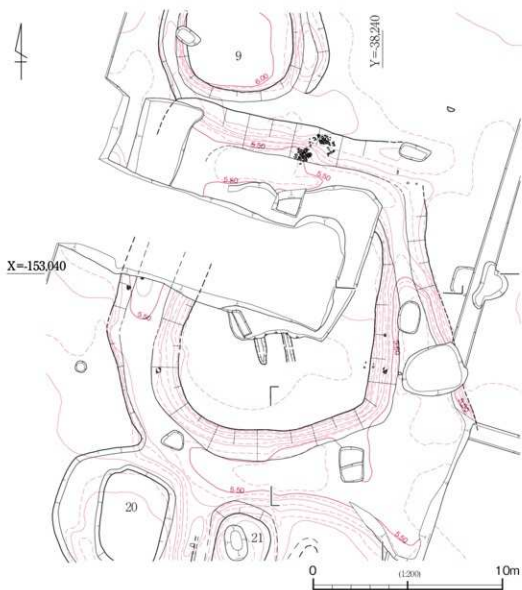
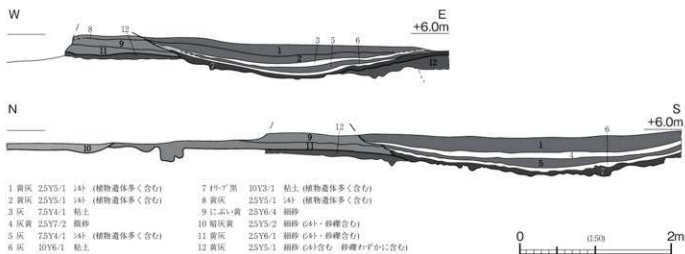


図 405 18号墳 平面



- 1 黄灰 25Y5/1 粘 (植物遺体多く含む)
 2 黄灰 25Y5/1 粘 (植物遺体多く含む)
 3 灰 7.5Y4/1 粘土
 4 灰黄 2.5Y7/2 微砂
 5 灰 7.5Y4/1 粘 (植物遺体多く含む)
 6 灰 10Y6/1 粘土

- 7 19-7 黒 10Y3/1 粘土 (植物遺体多く含む)
 8 黄灰 25Y5/1 粘 (植物遺体多く含む)
 9 1.5Y-黄 25Y6/4 微砂
 10 褐灰黄 25Y5/2 細砂 (砂・砂礫含む)
 11 黄灰 25Y6/1 細砂 (砂・砂礫含む)
 12 黄灰 25Y5/1 細砂 (砂)含む (砂礫が平かに含む)

図 406 18号墳 断面

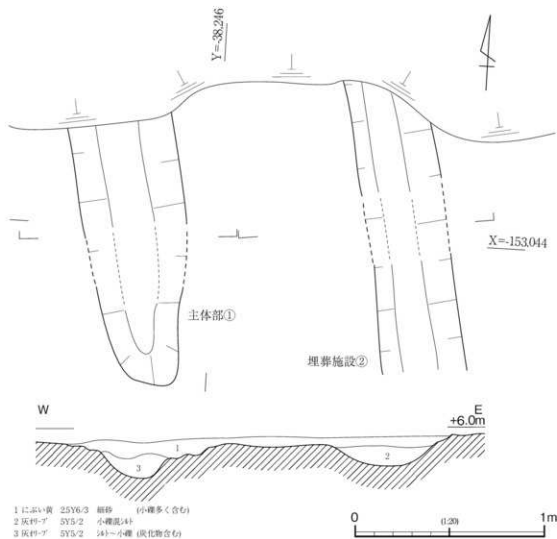


図 407 18号墳 主体部①・埋葬施設② 平・断面

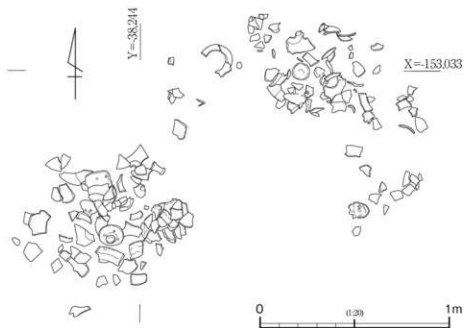


図 408 18号墳 遺物出土状況

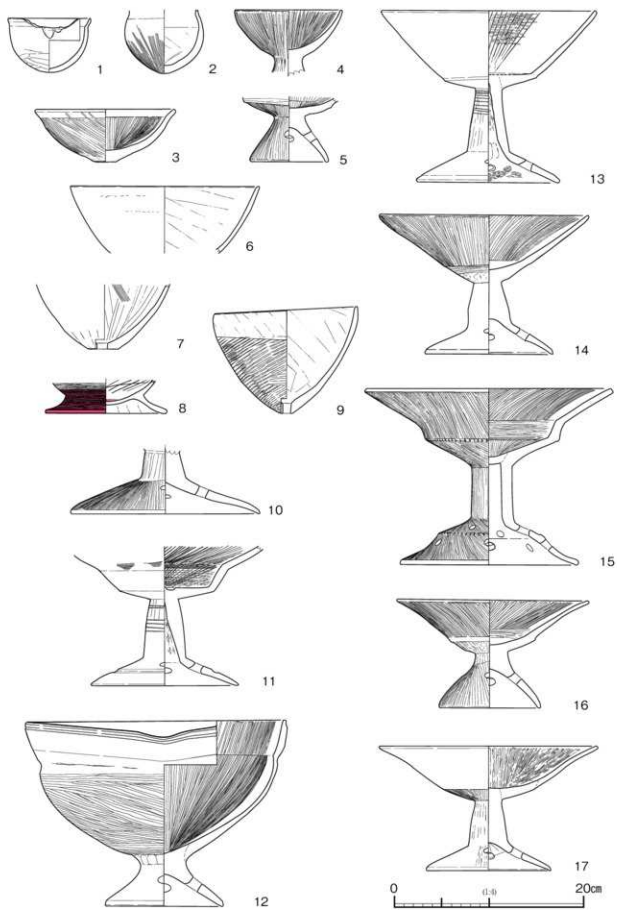


图 409 18号坑 出土遗物 (1)

され、規模は南北12m以上、東西約11.5mとなる。墳丘断面では第5 - 2層上に最大3層の盛土を確認した(図406)。周溝は幅2.5 - 4.5 m、深さ約30cmの緩やかな鉢状の断面形を呈し、墳丘の四周を巡るが、南側は隣接する墳墓との境界が不明瞭であり、共用するように一体化してしまった。埋土の最下に第5 - 1層が形成され、その上部に氾濫堆積物と耕作土が互層に堆積することから、第4層を通して徐々に埋没していったことが明らかとなった。周溝から、本墳墓には土砂の堆積があまり及ばなかったこと、第5 - 1層に近い段階に築造されたことがわかる。

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央、攪乱の南側に平行する2条の溝を検出した(図407)。西側の主体部①は長さ約1.4 m、幅55cm、深さ約18cm、東側の埋葬施設②は長さ約1.5 m、幅約40cm、深さ約14cmを測る。埋土から遺散や遺物は出土しなかった。攪乱の可能性も考えられたが、同様の主体部は22号墳にみられることから、本墳墓においても埋葬施設の可能性が高いものとして報告する。

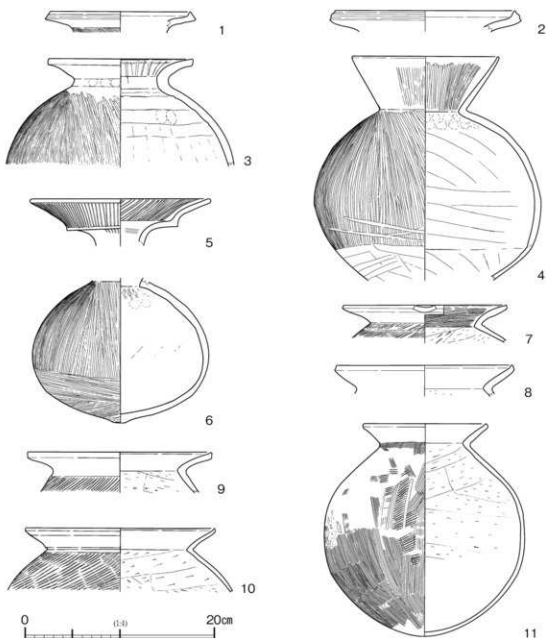


図410 18号墳 出土遺物(2)

遺物は、周溝の北・南東・西の3ヶ所からまとも出土した。最も多く出土した北側周溝では、9号墳との接点付近の法面に土器が散乱する状況が看取された(図408)。ただし、原形に近い状態の土器がほとんどみられないことから、投棄されたか、破片をばら撒いたものと思われる。土器の内容としては、小形鉢・鉢・台付鉢・器台・高杯・椀形高杯・壺・二重口縁壺・甕等がみられる(図409・410、図版429~432)。図409-1の小形鉢は丸底を帯び、口縁に打ち欠きがみられる。4は椀形高杯、5は口縁端部に欠損するものの、有稜の小形器台である。鉢は6・7・9のようにやや尖底気味のものが多く、中に有孔のものを含む。他に12のような段を持つ片口の台付鉢もみられる。8は器種不明の台部である。見込みと、底部から台部外面に赤彩が認められる。形状から半島系の影響を受けたものではないかと推測する。高杯は有稜・有段のもの以外に、14のように杯部の底面がほとんどなく、直線的に開くものや、17の緩やかに外反するものがみられる。図410-1・2は大きく開く口縁のつまみ上げた端部に凹線様の横ナデを施しており、阿波系壺の搬入品である。3は生駒西麓産の広口壺である。5は口縁内外面に放射状の暗文風ミガキを施す二重口縁壺である。6はケズリ出しによる小さな平底を持つ壺体部である。甕は7~10のように庄内形が大半を占めており、7では小さな片口が設けられている。11は丸底の甕であるが、肩部が直線的で、全体に比して頸部・口縁部の径が小さい。他地域の影響を受けた可能性がある。

これらの土器について、小形品や鉢は庄内式期古段階の様相を残すものが多い一方、高杯や甕には新段階として捉えられるような新しい傾向のものが目に付いた。総体的には庄内式期新段階に比定される

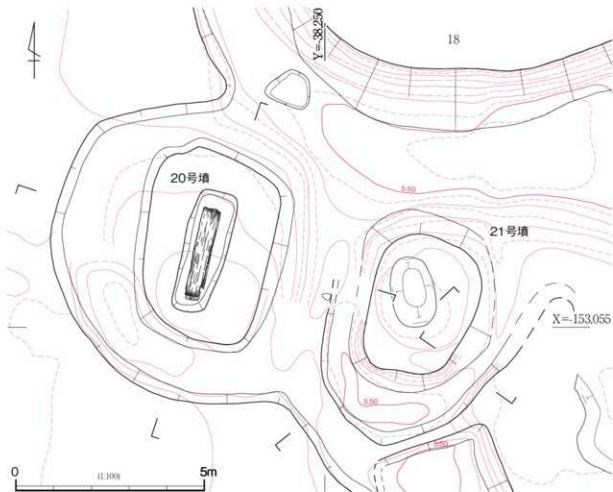


図411 20号墳・21号墳 平面

埋没したようであり、埋没の過程を知ることは非常に困難である。

埋葬施設については、墳丘のほぼ中央において主体部①を検出した(図413・414)。墓坑はほぼ墳丘主軸に沿って南北方向に設定されており、平面は隅丸長方形を呈する。墓坑の規模は、全長約3.2m、幅1.0~1.2mを測る。断面については墳丘分に合成したため、墓坑単体で掲載しなかった。墳丘と方向の異なる東西断面位置は、実際の記録位置を示したものである。墓坑の断面形は逆台形を呈し、深さ約42cmを測る。底面は第5-2b層に達し、T.P.+5.37m付近にて平坦に掘削される。埋土としては棺内流入土を含む5層を検出した。最下層の17は棺床から木棺中位の裏込めまで連続してみられることから、墓坑内に木棺を設置しながら埋積した状況が看取される。木棺は、すべてコウヤマキの板目材による組合式木棺であり、処々に腐朽がみられるものの、底板から蓋板までが揃った完全な状態で出土した(図版433)。両側板は縦に湾曲し、底板を外側から挟み込むような形で立てられていた。底板両端の内側には幅10cm前後の浅い溝が削られ、これに嵌め込むように小口板は置かれた。南側の溝は北側より

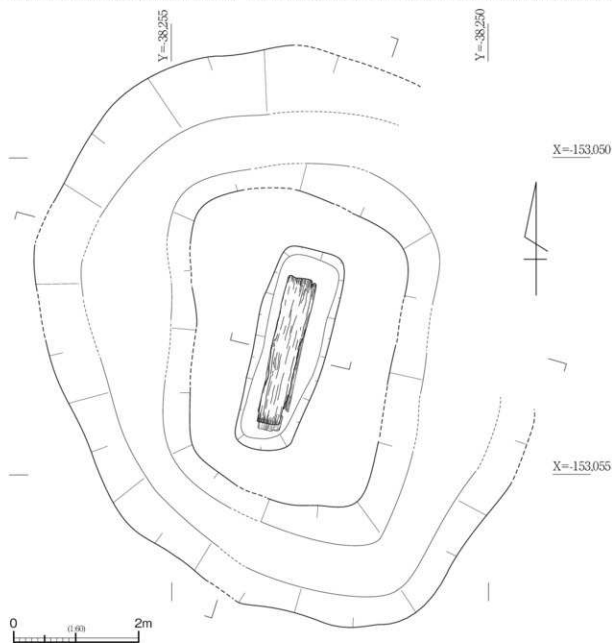


図413 20号墳 主体部① 平面(1)

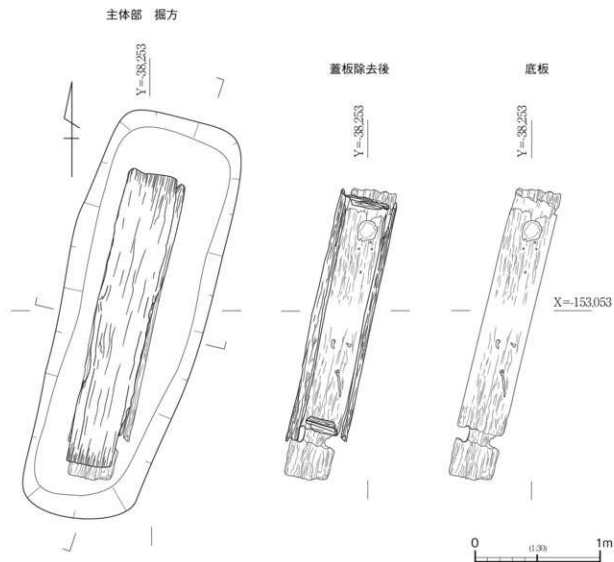


図414 20号墳 主体部① 平面(2)

内に位置し、片寄った小口板の距離に側板の長さ
は一致する。しかし、蓋板は底板の長さに揃って
いることから、当初より南端部に空間を設けるよ
うに製作されたと推測する。小口板と側板に囲ま
れた主室部分の規模は、長さ約1.8m、幅約38cm、
高さ約22cmと推定される。

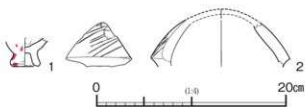


図415 20号墳 出土遺物

木棺の主室からは蛭状化した頭骨や脛骨が出土した。頭骨の出土位置から、真北から約13.5°東に振
った北側が頭位であることが分かった。また、みつかった歯片の鑑定により、被葬者は若年の成人であ
ることが明らかとなった。

遺物はほとんど出土しておらず、周溝内からみつかった小片を図示する(図415、図版432)。1は
小型の台付鉢と思われる、外面の部分的に赤色顔料の付着が認められる。2は手焙形土器の覆部片であり、
外面に線刻を施す。写25は長さ4.3cm、最大径2.9cmの砂岩製不明品である。05349土器集積の例から、
投石と考える。墳丘盛土や墓坑埋土からは第V様式系甕や有稜高杯の細片が出土しており、これより下
ることは明らかである。

なお、棺内から出土した種子のAMS年代測定では、130 A.D.～240 A.D.という結果を得ているが、墓坑内にも下層遺物が多数混入しており、あくまでも参考資料とする。

21号墳 20号墳の東側、X = -153,054.5、Y = -38,247.5付近に位置する(図411)。北を18号墳、西を20号墳、南東を56号墳に囲まれた墳墓であり、墳丘中央に攪乱が存在し、埋葬施設は検出されなかったため、南北に分けて調査を行った。墳丘は丸味を帯びた隅丸方形を呈し、長辺約4.2 m、短辺約3.2 mを測る。墳丘内では基盤層である第5-2層とわずかな墳丘盛土を確認したのみである。

周溝は、北半の調査では18・20号墳に連続する落込みを検出したただけであったが、南半では墳丘を巡る幅1.0～1.6 m、深さ約13 cmの周溝を検出した。埋土はいずれも氾濫堆積物であり、第5層を含まないとされる。埋葬施設は確認されなかった。

遺物では、破片が南側周溝からまとまって出土しており、その一部を図示した(図417、図版432・434)。3は生駒西麓産の胎土による有段高杯の杯部片である。4は甕の台部片である。外表面に粗粒粘土を貼付しており、S字状口縁甕が東海から直接搬入されたことを示す。5は端部を上方向につまみ上げた口縁部片であり、吉備系壺の搬入品である。高杯や甕の様相から、庄内式期新段階に比定する。

56号墳 X = -153,059、Y = -38,241付近に位置する(図418、図版133)。北西に21号墳、南東に46号墳が隣接する。第4層を除去すると方形に広がる黒色土を検出したため、これを墳丘と判断した。墳丘北部が調査区境であったため、形状に不明瞭な箇所もみられるが、墳丘の平面は概ね隅丸方形を呈し、長辺が推定で約9.5 m、短辺約8.0 mの規模を有することがわかった。墳墓断面では基盤層の第5-2層と盛土層を検出するのみであり、残存する墳丘高は約10 cmとなる。明確な周溝の掘削や埋土の堆積は認められず、周溝部分から墳丘上面にかけては泥層が堆積する。第5-1層が一切確認されないことから、おそらく氾濫による堆積の際に流失してしまったものと思われる。埋葬施設は検出できなかったが、上記のように墳丘盛土と共に流失した可能性が高い。

出土遺物には高杯・甕・壺等がみられる(図420、図版434)。1・2は盛土、3～5は周溝から出土した土器である。3は平底の小型壺である。4は横ミガキを多用し、小さな凹み底を持つ細頸直口壺の体部である。5は口縁端部と屈曲部の外面に竹管文と、口縁端部の内面に櫛溝波状文を施す。これらの土器から、56号墳は庄内式期中段階から新段階に比定する。



図416 21号墳 周溝 断面

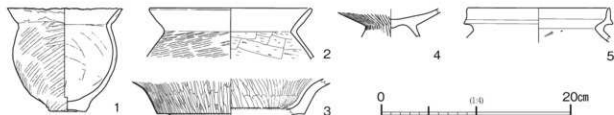


図417 21号墳 出土遺物



図418 56号墳 平面

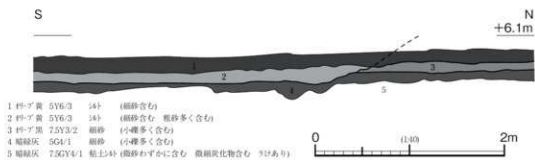


図419 56号墳 断面

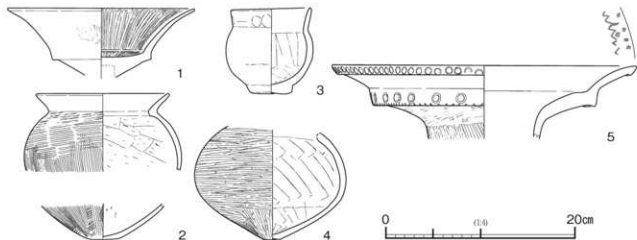
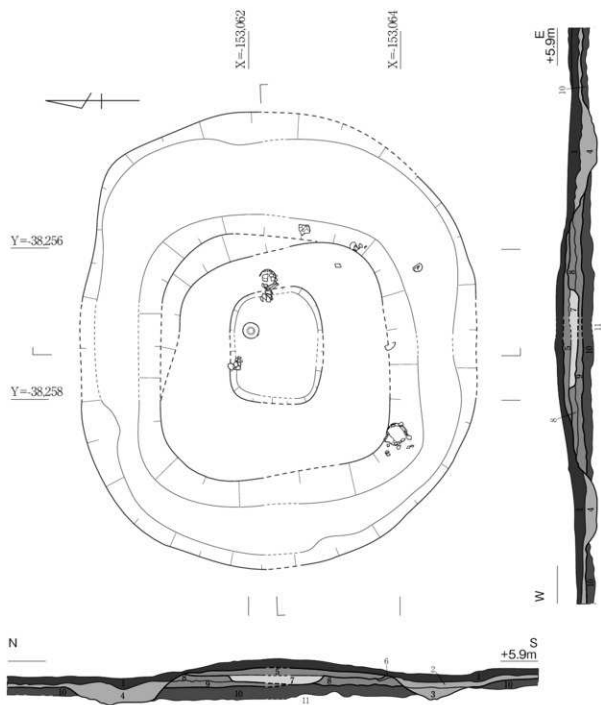


図420 56号墳 出土遺物



- 1 灰仲子 5Y5/2 砂礫混粗砂
- 2 灰仲子 5Y4/2 砂礫 (砂多を含む)
- 3 灰 7.5Y4/1 4# (礫多含む)
- 4 灰 5Y4/1 微・細砂 (砂わすかに含む)
- 5 灰・7# 5Y3/2 粗砂 (礫多含む)
- 6 灰 5Y4/1 微・細砂
- 7 灰・7# 5Y3/2 微・細砂
- 8 灰・7# 5Y3/2 微・細砂
- 9 灰仲子 7.5Y4/2 微・細砂
- 10 灰・7# 5Y3/1 微砂 (微砂わずかに含む)
- 11 灰・7# 5Y5/4 微砂 (部分的に礫多含む)



図 421 45号墳 平・断面

45号墳 調査区の西側、 $X = -153.062$ 、 $Y = -38.257$ 付近に位置する（図421、図版135）。20号墳と44号墳の間に築造され、攪乱や墳丘の削平をまったく受けずに、ほぼ当時の形状のまま保存されていた。本墳墓群の中でも貴重な資料であり、低墳丘の全貌を知る数少ない例である。

墳丘の平面は隅丸方形であり、基底面における規模は東西約3.7m、南北約3.15mを測る。墳丘の北東斜面が段状をなすが、墳丘の崩落による変形と考える。墳丘断面では、下面に基盤層となった第5-2層と、その上部に4層に細分が可能な盛土を確認した。これらの墳丘盛土は、埋葬施設の構築面を基準として上下に区分が可能である。下半の盛土の堆積状況から、構築面まで平坦に積み上げた盛土を掘り込んで墓坑を形成したことが分かった。墳丘の最上部は土壌化により周溝埋土から連続する第5-1層に変化し、同層上面が本来の墳頂であった可能性を考える。実際には周溝埋土として崩落した盛土も加わるため、残存した墳丘高約25cmの倍程度であったと推測される。

周溝の平面形はかなり丸みを帯び、幅1.0~1.25m、深さ約20cmを測る。土質の観察により、周溝の埋土は墳丘の崩落土であることが判明した。この崩落土は、周溝内だけでなく墳墓外に至る広い範囲に

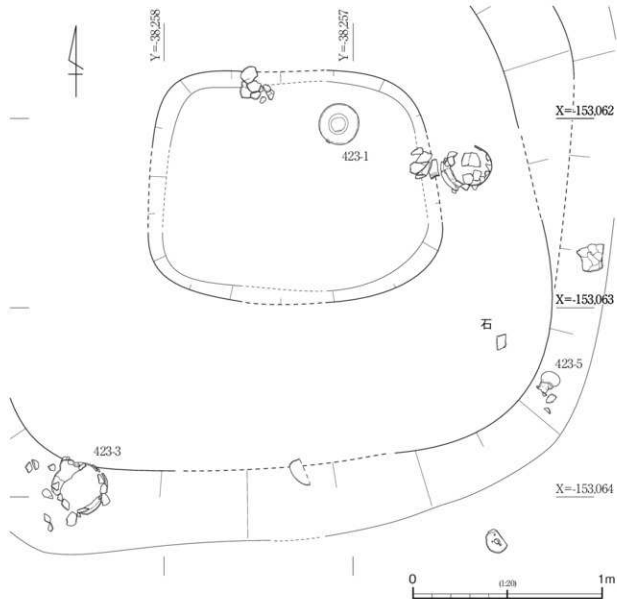


図 422 45号墳 遺物出土状況

堆積する。早い段階に周溝の埋没した可能性が高く、第5-1層形成時には、墳丘はなだらかな地形と化していたようである。

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央において主体部1基を検出した。主体部①の平面は隅丸方形を呈し、幅約1.2m、長さ約1.5m、深さ約10cmを測る。内部から木棺や人骨の出土はみられなかった。

遺物は、墳墓の南東部を中心とする墳頂部から周溝にかけて出土した(図422)。出土状況から、本来は墳頂部の主体部①周辺に立てて並べられていたものが、北側の土器はそのままの位置で崩壊し、南側のものは周溝へと転落したと推測する。遺物としては、土器に高杯・小形丸底壺・小形鉢・小型壺・直口壺・甕、石製品に砥石がみられる(図423、図版434~436)。図423-1・4・9は主体部①の上面から出土した土器であり、有段高杯・小形丸底壺以外に山陰系の複合口縁甕が含まれる。甕は墓坑東端の中央に位置し、頭位に正置されていた可能性がある。2・3・5~8は墳丘から周溝にかけて出土した遺物である。多くが墳丘裾に点在し、原形に近い状態でみつかったことから、上述のように墳丘から転落したものと推測する。直口壺や庄内式甕等、古い傾向がみられるものの、小形品や高杯に細かい横方向のミガキを多用する点や複合口縁甕から、布留式期最古段階に比定する。

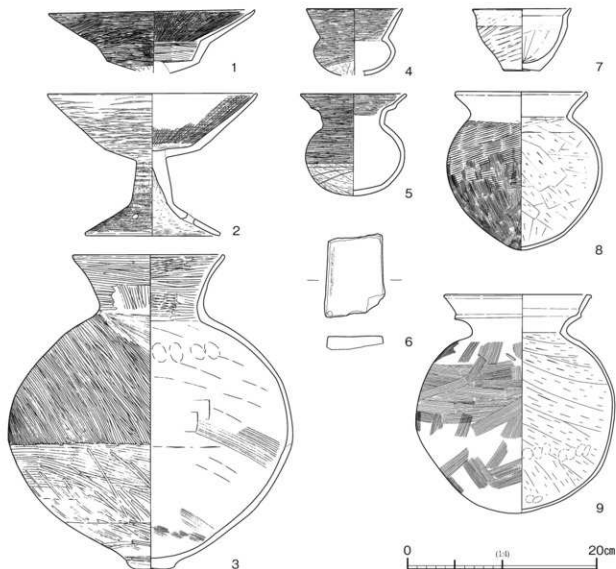


図 423 45号墳 出土遺物

48号墳 調査区の南西部、 $X = -153,055$ 、 $Y = -38,275$ に位置する（図424、図版136～139）。墳墓には攪乱がみられず、平面形状としての残存は良好である。墳丘の平面は隅丸方形を呈し、基底面における規模は長辺約7.5m、短辺約6.8mを測る。墳丘断面では、2層の盛土と、下面に基盤層である第5～2層を3層検出した（図425）。第4層の耕作による攪拌を受けたため、墳丘上部は削平されるものの、埋葬施設の痕跡を確認することができた。本墳墓では基盤層を3層に細分するが、上部の層14・15の土壌化が顕著であったためである。ただし、墳墓周辺の第5～2層の標高と比した場合、かなり高過ぎる感があり、土壌化層の盛土したものを旧表土と誤認した可能性も考えられる。

周溝は、南西部が幅約3.8mに拡張する以外は、幅1.7～2.3m、深さ35～50cmで墳丘の四周を巡る。埋土の観察によると、北東周溝は墳丘盛土の崩落土により埋没するが、その他では崩落土量が少なく、

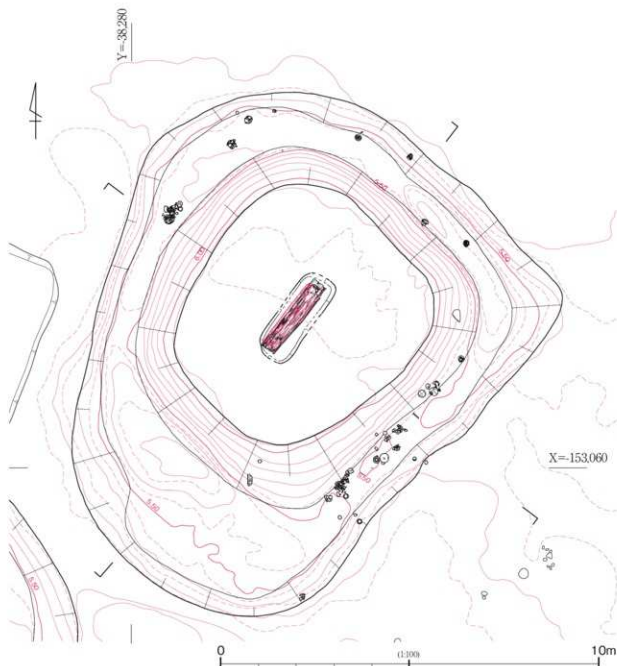
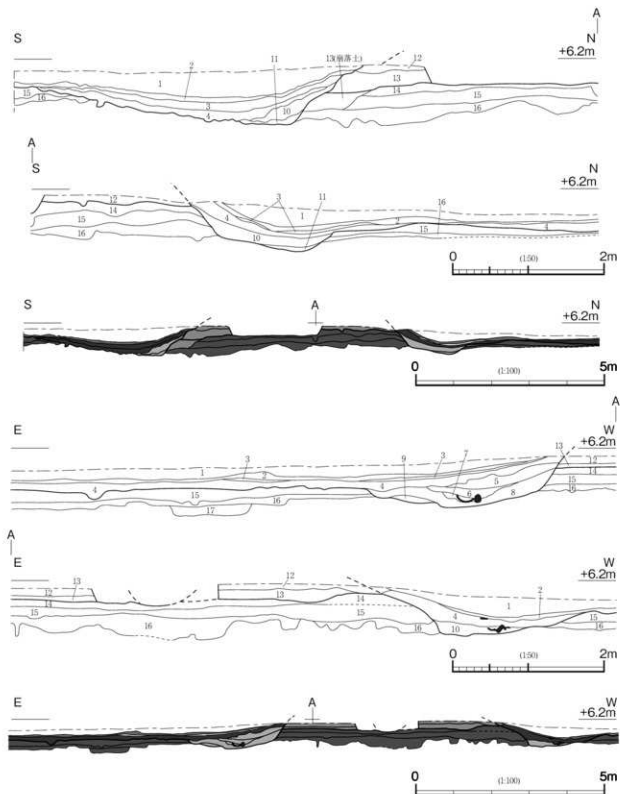


図424 48号墳 平面



- 1 緑灰 75GY6/1 ㉔ (植物遺体含む)
 2 灰 5Y4/1 ㉔ (植物遺体含む)
 3 灰沖-ア 5Y4/2 ㉔ (細砂含む ㉔あり)
 4 黒炭 25Y3/1 細砂 (根砂・植物遺体含む)
 5 黄灰 25Y4/1 細砂 (根砂含む)
 6 暗灰黄 25Y5/2 細砂 (根砂含む)
 7 暗沖-ア 5Y4/3 灰・細砂
 8 沖-ア黄 5Y6/3 灰・細砂
 9 沖-ア黄 5Y6/3 灰・細砂 (㉔?㉔含む)

- 10 灰 5Y4/1 細砂 (根砂・細砂含む)
 11 沖-ア黒 5Y3/1 ㉔・微砂 (根砂・植物遺体含む)
 12 灰沖-ア 5Y5/3 細砂 (根砂多く含む)
 13 灰 75Y5/1 細砂 (根砂多く含む)
 14 暗灰黄 25Y4/2 細砂 (㉔・細砂?㉔含む)
 15 灰沖-ア 5Y5/2 細砂 (根砂含む)
 16 暗沖-ア灰 25Y4/1 細砂 (根砂・砂礫含む)
 17 暗沖-ア灰 25Y4/1 細砂 (根砂・炭化物含む)

図 425 48号墳 断面

上面が土壌化した段階には埋没し切っていない箇所も存在したようである。

埋葬施設は、墳丘中央に**主体部①**を検出した(図426、図版139)。墓坑の平面は隅丸の長方形を呈し、長さ約2.6m、幅約1.0m、深さ約26cmを測る。周辺の盛土層が平坦にみえることから、墓坑は掘込によって構築された可能性が高い。墓坑の埋土は棺内流入分を含めて7層を確認した。最下層は棺床用の整地土であるが、他はすべて裏込土と解釈できる。木棺は底板上に小口板と側板を立てる組合式木棺であり、南西の小口板以外の棺材は残存していた(図版441)。底板は長さ約2.24m、幅約54cmを測り、棺の内寸は長さ約2.0m、幅約50cmと推定する。樹種はすべてコウヤマキであり、底板の両端は段状に削り取られる。

底板の直上に蠟状化した頭骨と長骨、および歯片が数点出土したものの、被葬者の鑑定には至っていない。また、頭骨部分の広い範囲に赤色顔料が付着しており、埋葬時に顔面等に塗布された可能性が高いと考えられる。主体部の主軸は墳丘の長軸に一致し、木棺北側に頭骨が出土したことから、頭位は真北から約39°東に振った方向である。

遺物は周溝を中心に多数出土した(図424)。拡幅された南西周溝では遺物が皆無に等しいのに対し、南東と北西周溝では重層的に出土する場所が見つかった(図427・429)。北東周溝に点在するものを

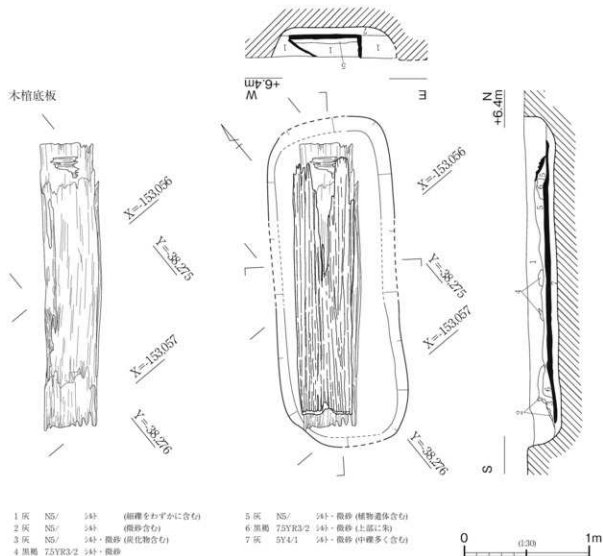


図426 48号墳 主体部① 平・断面

含め、いずれの土器も原形に近い状態で出土することから、遺物は墳丘上から転落したものか、廃棄されたとしても丁寧に扱われたものと考えられる。

出土した遺物としては、高杯・鉢・小形丸底鉢・壺・甕などの土器以外に、石製品、木製品が挙げられる(図428・430～432、図版436～441)。高杯には椀形・有稜・有段の3種があり、細かいミガキを多用し、杯部内面に放射状暗文を施すものが多い。図430～5は古く、8は新しい傾向の高杯であるが、概ね庄内式期新段階が揃っている。11は稜を持つ脚裾部に2段の透孔を穿ち、北陸の影響を受けた高杯の可能性がある。鉢は突出底の小形品以外に中大型のものはみられなかった。図430～7は台付鉢であり、内外面に水銀朱が付着する。図430～4は不明土器であり、ハケ後にナデ調整を行う。瀬戸内地域にみる低平な高杯の影響を受けたものであろうか。壺は短頸壺・直口壺・細頸直口壺・長頸壺・複合口縁壺等、種類が豊富である。図428～3は短頸壺であるが、体部が丸く、平底も丸味を帯びた新しい傾向の壺である。図版にみる孔は、後世の割れである。13・14は細頸直口壺の体部と思われる。13

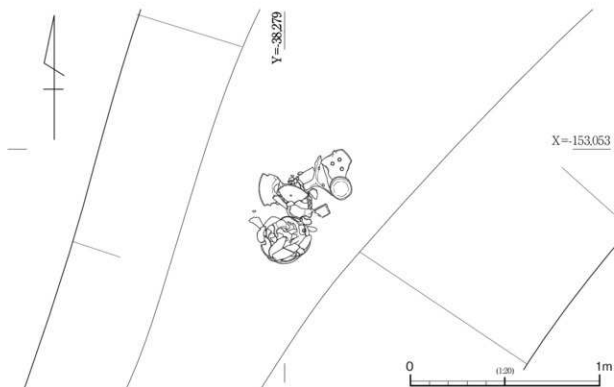


図427 48号墳 遺物出土状況(1)

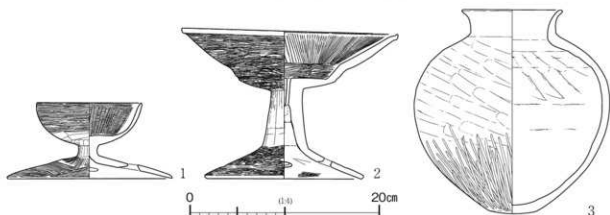


図428 48号墳 出土遺物(1)

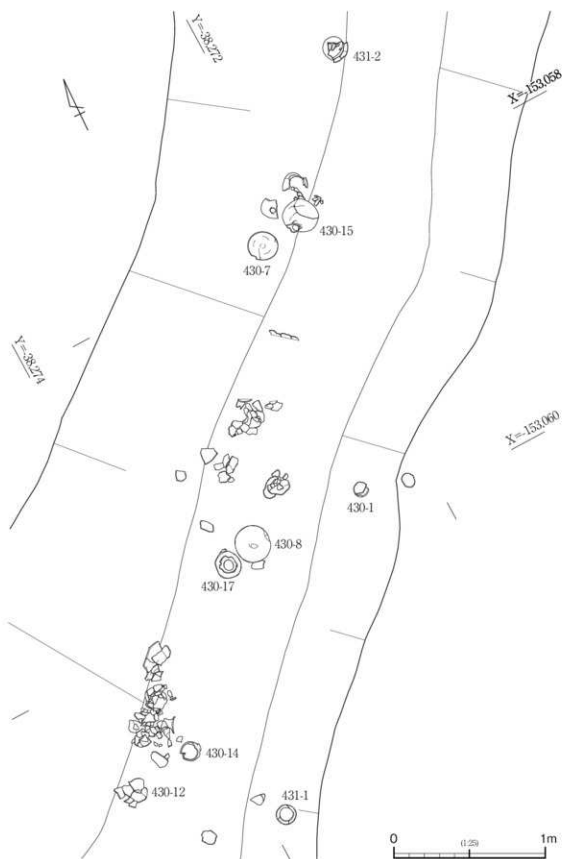


图 429 48号坑 遗物出土状况 (2)

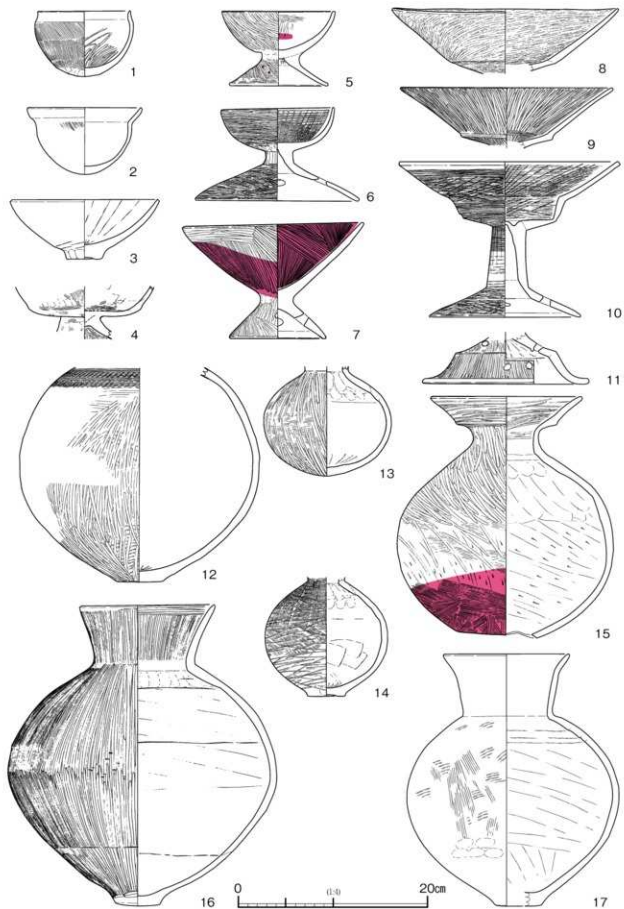


图 430 48号填 出土遗物 (2)

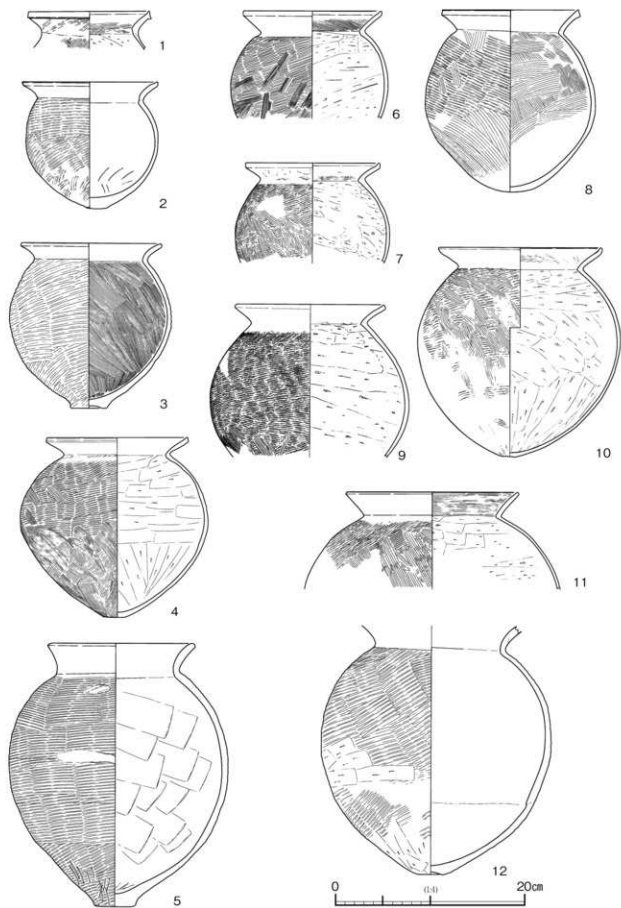


图 431 48号填 出土遺物 (3)

は体部・底部とも丸く、14は底部が平底であるものの、体部に細かい横方向のミガキを施す。15は複合口縁甕である。底部は焼成後に穿孔されたものであり、体部外面の下半には赤色顔料の塗布が認められる。甕は小型品から大型品まで多種多様であり、第V様式形甕と庄内式甕の2種に分かれる。図431-1は口縁端部を上下につまみ出す異形甕である。2・3・5・8・12は第V様式形甕であり、5は肩部に粘土を掻き取った痕跡があり、12は底部をケズリによって尖底化させる。8は大和形甕の影響を強く受けたものである。4・6・7・9-11は庄内式甕である。いずれも底部が尖底化し、内面にケズリ調整を施す。なお、図431-3の図版において、体部に孔がみられるものの、当時の穿孔ではない。

これらの土器以外に石・木質遺物が出土した(図432)。1はシルト岩製であり、弧状に摩滅した痕跡がみられることから砥石と考える。2・3はいずれもヒノキの追柵目の木片である。加工等の痕跡は認められないものの、材質・形状が揃っている点と、他の墳墓の出土例から、組合式木棺の小口板である可能性が高いと思われる。主体部のコウヤマキ製と異なるため、周辺に別の埋葬施設が存在した可能性も考えられる。4・5はいずれも墳丘斜面から出土した。4は砂岩、5は火山礫性凝灰岩によるもので、5は両端を中心に煤が付着する。人為的に運ばれたことは明らかであるが、用途は不明である。これらの遺物から、48号墳の築造は庄内式期新段階に比定する。

47号墳 調査区の南西、X=-153.062.5、Y=-38.289付近に位置する(図433、図版140)。北東

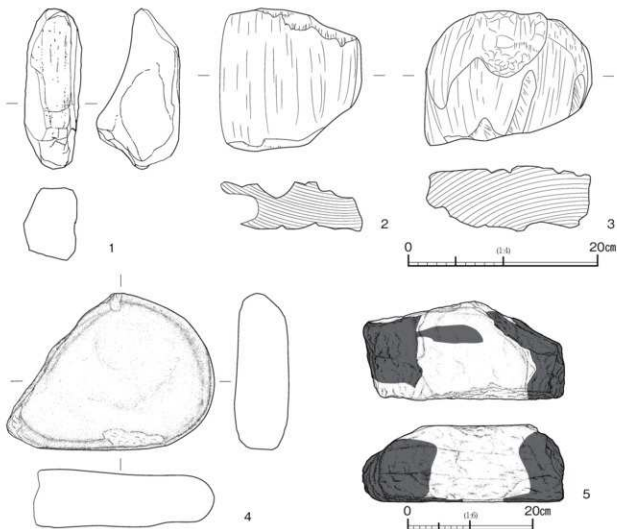


図432 48号墳 出土遺物(4)

に48号墳、南東に44号墳を配するが、本墳墓より西側にはそれらしき遺構がみられないことから、当墳墓群の西限となる可能性が高い。墳丘のほぼ中央に攪乱が存在するものの、全体的な形状としては残存が良好である。

墳丘の平面は隅丸方形を呈し、基底面での規模は長辺約8.0 m、短辺約7.3 mである。墳丘断面によると、下面には複数に細分可能な第5 - 2層が残存し、その上部にやはり複数層の盛土を検出した(図434)。土壌の変質によるものか、墳丘中央の攪乱より東、南側の断面では、盛土の細分が非常に困難であった。しかし、東西断面に示すように、盛土層の中位に埋葬施設の一部を検出したことから、本来は墓坑の構築面が存在したと思われる。

周溝は墳丘の四周をほぼ均等に巡っており、幅1.4~3.0 m、深さ45~65cmを測る。周溝は、墳丘から底部にかけて盛土の崩落土が堆積し、その上部は土壌化により第5 - 1層と化する。わずかに周溝の名残が残るものの、そのまま上部に第4層の耕作土が複数形成されることから、元々、当地への氾濫堆積物の影響は少なく、一気に周溝が埋没してしまうことはなかったものと考えられる。

埋葬施設は、前述のとおり攪乱の南東に墓坑らしき落込みを確認したのみである(図433グレー部分)。規模・形状を記録するまでには至らなかった。

遺物は周溝内埋土を中心にまとまって出土した。大半が墳丘崩落土と第5 - 1層からみつかったものの、細片が多く、図化できないものがほとんどであった。墳墓の検討のため、直接的に関しないものも含めて図示した(図435、図版442)。1は周溝内から出土した弥生時代後前半の鉢である。2~4は、墳丘盛土および直下から出土した土器である。2は小型の器台、4は底部をハケ調整により尖底化



図433 47号墳 平面

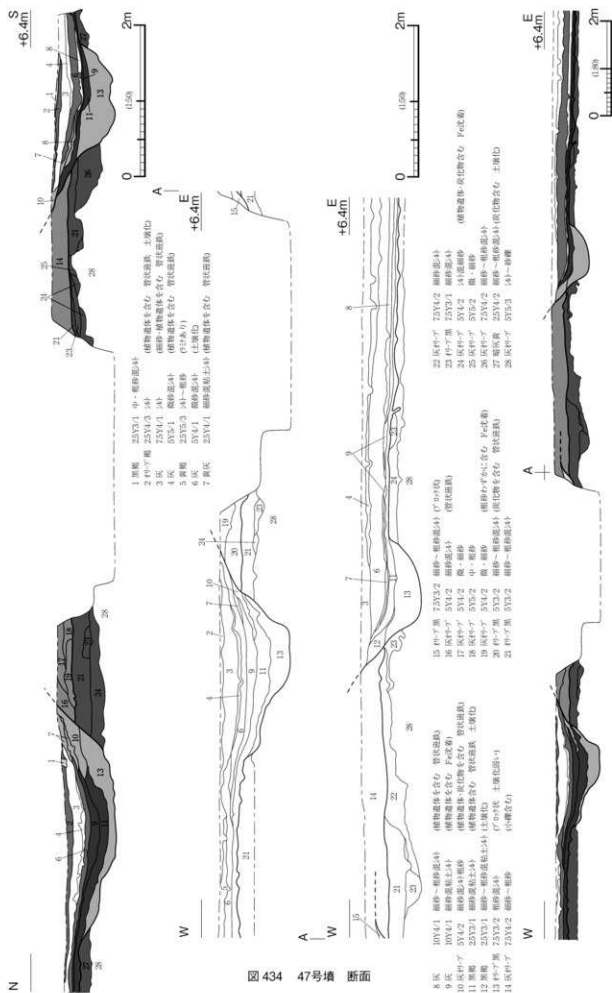


图 434 47号堤 断面

した庄内式甕である。3は器種不明であるが、尖底でやや長胴的な形態から、製塩土器等のミニチュア品と考える。5は南東周溝から出土した高台状の平底を有する鉢の底部片である。6は南西周溝の第4-2層からほぼ1個体分の碎片が出土した布留式甕である。本墳墓の遺物の中では、唯一の原形に近く復元できる土器であるが、氾濫堆積後の耕作土から出土したため、下限を示す参考資料に止めておく。

出土遺物が少ないため、墳墓の築造時期を特定することは困難であるが、盛土内から庄内式甕や小形器台が出土することから、庄内式期新段階以降、布留式期古段階までの間とする。

44号墳 調査区の南西付近、 $X = -153,084$ 、 $Y = -38,260$ に位置する(図436、図版141~143)。01-1調査区と02-1調査区の境界が墳丘を縦断していたため、墳丘の北側と南側においてそれぞれ別に調査を実施したものである。先年に調査を行った際は、墳墓の規模に比して調査範囲が狭小であったため、墳墓全体を同時に検出することができず、前方後方墳であることが認識されなかった。その後、北側に隣接する広範な調査を行い、同墳墓の存在を確認したことから、過去のデータ類を再整理し、本来の形状に復元したものが44号墳である。

墳形は前方後方形であり、基底面における規模は、全長約33.5m、後方部長約19.5m、主軸にて反転復元した後方幅16~18m、くびれ部幅約9.0m、前方部長約14.0m、前方部幅約12.5mを測る。墳丘断面が全体の一部しか確認できなかったことや、墳丘上部が古代以降の耕作や整地により著しく削平されたことから、全体的な内容はほとんど不明である。確認した墳丘の高さは、基底面から最大で約40cmであり、墳丘の下面では2~3層に細分が可能な基盤層の第5-2層を検出した(図437~439)。これは、当墳墓群の中でも旧表土が最も多く残存する墳墓の一つである。墳墓外では1~2層の第5-2層と、第5-1層がみられることから、44号墳は第5-1層形成直前あるいは過程において築造されたと推測できる。部分的ではあるが、くびれ部や前方部の断面において墳丘斜面側に堤状の盛土がみられることから、墳丘築造では周溝際の墳丘縁辺に盛土を行った後、内側に土砂を充填する方式が採られたと考える。なお、墳丘の主軸は真北より約91.5°東に振った、ほぼ真東を指向する。

周溝の平面形は、墳丘に沿わない隅丸形状を呈する。周溝幅は4.5~5.0mを基本とし、くびれ部付近のみ約10mを測る。周溝断面は、22号墳等と同様に浅い皿状を呈し、深さ40~50cmである。これも墳丘規模が大幅に拡大したため、盛土に必要な土量を確保するために幅広く周溝を掘削したものと思われる。周溝が拡大したことにより、墳丘の巨大さを際立たせる視覚的效果も同時に得ることができたのであろう。周溝の埋土としては、底部に墳丘盛土を起源とする崩落土が層厚10cm前後で薄く堆積し、そ

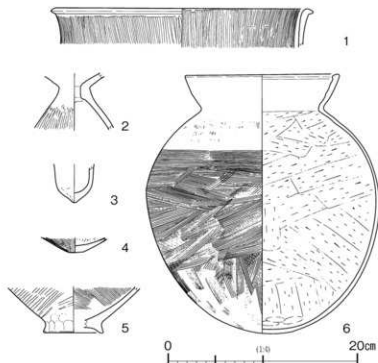


図435 47号墳 出土遺物

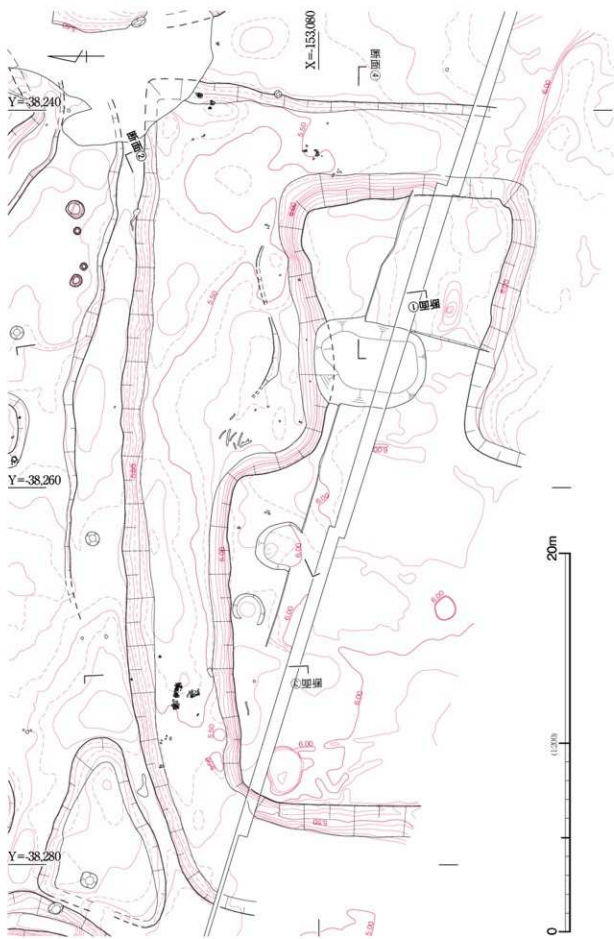


图 436 44号墳 平面

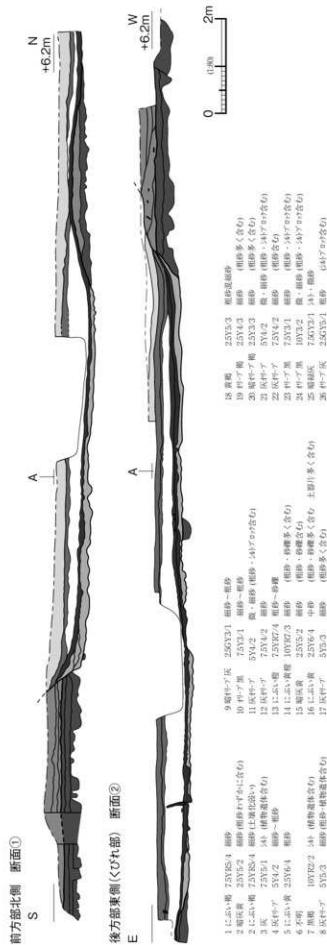


図438 44号墳 断面(2)

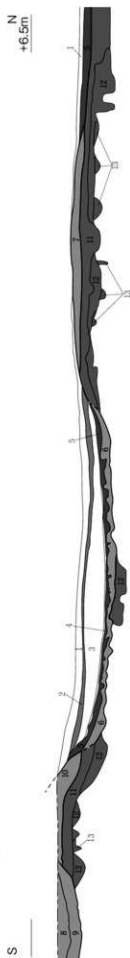
の上層に土壌化した第5-1層を一様に検出した。第5-1面では、築造当初とほぼ変わらない状態にあったと思われる。埋土の中心となるのは第4層の氈蓋堆積物であり、これにより周溝は完全に埋没して平坦化する。このような状況は、墳丘の南東側において顕著であったと考えられ、01-1調査では流路と誤認するほどの大量の土砂が堆積していたことから、この氈蓋は調査区の南側からもたらされたことが明らかである。

他の墳墓にみられない44号墳の特徴として、北周溝の外側に連なる周堤がある(図436)。基底面の幅1.5~3.5m、高さ15~20cmを測り、内部に墳丘と同様の盛土を確認した(図438断面①、図442断面③)。これを築かない他の周溝肩部と標高が同一であることから、地形的に低い墳墓北側への越水防止用に作られたと考えられるものの、あまり実用的ではない。むしろ周溝あるいは墓域を明確にするための演出ではなかったかと推測する。

埋葬施設は、墳丘内外のいずれにおいても検出できなかった。通常、後方部に構築する主体部については、墳丘上面に6世紀以降の須恵器や土師器が多数出土したことから、後世に墳丘上部が著しく改変され、その際に消失した可能性が高いと考える。なお、後方部周溝の西側、X=-153.076、Y=-38.289付近において、頭骨が出土した(図版143)。氈蓋堆積物の直下からみつかったもので、掘形等の残存は確認できなかった。頭骨の移動した様子が認められないことから、05364土坑墓としたが、44号墳に伴う副次的な埋葬施設であった可能性もある。

遺物は墳丘上から周溝外までの広い範囲に散見されるものの、出土量はそれほど多くない(図436)。周溝内で原形に近い状態で破砕したものや数個体がまとまって出土する等、幾つかの特徴的な遺物も看取されるが、前述

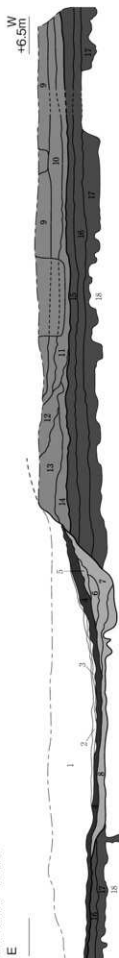
後方部北側 断面③



- 1 灰中子 5Y6/2 54 (相砂含む) 31(灰あり)
 2 灰中子 25Y4/2 灰・相砂
 3 灰白 25Y8/1 相砂
 4 灰中子 25Y4/2 54・相砂 (植物遺体含む)
 5 黒土 25Y3/1 相砂 (相砂・植物遺体・灰化層含む)
 6 灰中子 5Y5/3 相砂 (相砂多く含む・植物遺体含む)
 7 褐色土 25Y5/2 相砂 (相砂多く含む)

- 8 灰質 25Y6/2 相砂 (相砂含む)
 9 灰 10Y4/1 相砂 (相砂含む)
 10 灰中子 25Y4/2 相砂 (相砂含む)
 11 灰中子 5Y5/3 相砂 (相砂・植物遺体含む)
 12 黒土 5G4/1 相砂 (相砂・植物遺体含む)
 13 灰中子 灰 25Y3/1 相砂 (相砂多く含む)

前方部東側 断面④



- 1 土灰・黄 25Y6/4 相砂
 2 中子 灰 25Y2/1 54
 3 中子 灰 5Y3/1 54
 4 中子 灰 5Y3/2 相砂 (相砂含む)
 5 中子 灰 25Y2/1 相砂 (相砂含む)
 6 中子 灰 10Y3/1 相砂 (相砂含む)
 7 灰中子 灰 25Y3/1 相砂 (相砂含む)
 8 黒土 25Y3/1 相砂 (相砂・5478(含む)
 9 黄土 25Y5/3 相砂 (相砂)

- 10 中子 灰 25Y4/3 相砂 (相砂多く含む)
 11 灰中子 灰 25Y3/3 相砂 (相砂多く含む)
 12 灰中子 5Y4/3 灰・相砂 (相砂・5478(含む)
 13 灰中子 5Y4/3 灰・相砂 (相砂含む)
 14 灰中子 5Y4/2 灰・相砂 (相砂・5478(含む)
 15 灰中子 25Y4/2 相砂 (相砂含む)
 16 中子 灰 25Y3/1 相砂 (相砂・5478(含む)
 17 灰 10Y4/1 灰・相砂 (相砂・5478(含む)
 18 黒土 25Y3/1 54・相砂

図439 44号墳 断面(3)

のように上層のものが混入したり、下面遺構のものが露頭したりするため、遺物の把握は困難を極めた。遺物としては、土師器に小形品・高杯・鉢・壺・甕・手培形土器があり、それ以外に木製品や後世の須恵器等がみられる(図440~442、図版443~448)。図440-1~3は墳頂部および盛土から出土した後世の須恵器・土師器である。陶器Ⅱ型式中頃の所産と考えられ、後述する第3面からの攪乱に伴うものである。1の杯蓋頂部に叩き目、2の杯身外底面にヘラ記号がみられる。図440-6・11、図441-3・5・6も墳頂部や盛土から出土した土器であるが、墳墓群とほぼ同時期の遺物である。図441-3は直口壺の口縁部片であり、外面に線刻画を描く。一部のため詳細は不明であるが、建物の屋根等にも多い表現である。5は被籠成型による壺底部片である。6は口縁部の内外面に細かな櫛描波状文を帯状

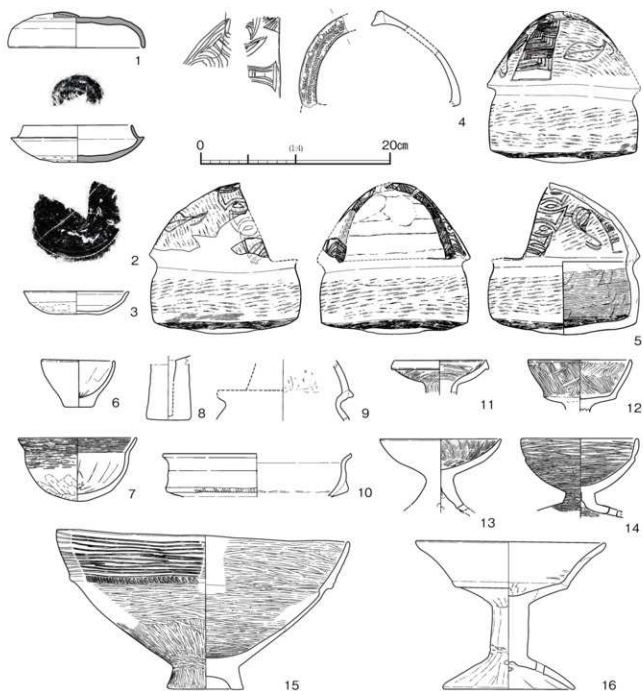


図440 44号墳 出土遺物(1)

に施す二重口縁壺である。図440-4・9、図442-6は墳丘下面の遺物である。図440-4は手培形土器の覆部片であり、端部に竹管文と浮文、外面に線刻画を施す。撥形と鋸歯文を用いる点は同図5と同様であるが、表現や構成が明らかに異なる。図442-6は口縁端部に櫛描波状文と竹管円形浮文、頸部に刺突のある突帯を巡らせる加飾広口壺である。平底部分には顕著な磨耗が認められる。図440-5、図441-7・8、図442-4は周堤あるいは周溝肩から出土した土器である。図440-5は全体に叩き目が残るものの、覆部に線刻画、同端部に鋸歯文を施す手培形土器である。線刻画は、縁辺に撥形と縄紐の連続を表し、中央に入れ子の曲尺文を交互に繋げた板状を描き、その左右に水鳥？を配している。

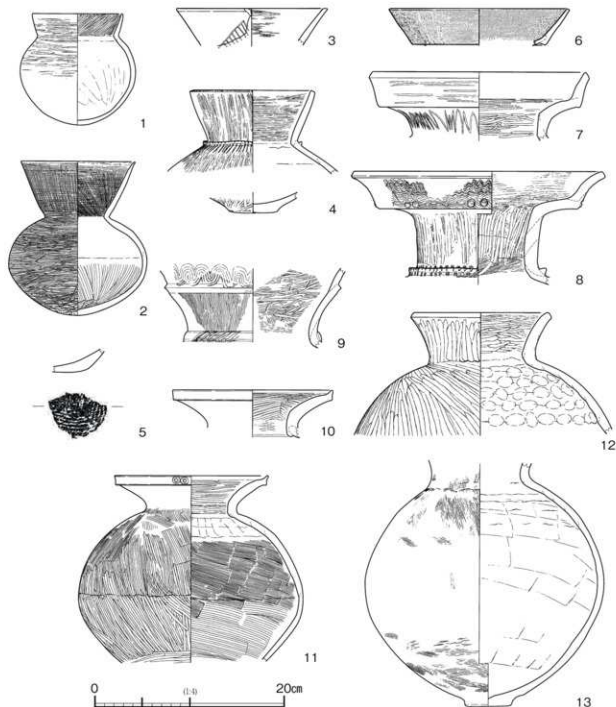


図441 44号墳 出土遺物(2)

図441-7・8は複合口縁壺で、8は口縁部に波状文と竹管文、頸部に刺突を施す突帯を巡らす。残りはすべて周溝内の埋土から出土した遺物である。図440-14はくびれ部付近でみつかった口縁下部に段を持つ椀形高杯である。酒津式に類し、吉備地方の影響によるものと思われる。15は西周溝付近から出土した台付鉢である。口縁部内外面が段状に肥厚し、外面は12条の沈線と下端の突出部に刺突文を施す。管見では同一形態のものがなく、類似した施文が丹後から北陸地方にみられることから、折衷して作られた可能性がある。図441-4・9、図442-3は北周溝の崩落土から出土した。4は灰白色の精緻な胎土を特徴とし、口縁端部と頸部の突帯に刻み目を施す直口壺の口縁部と底部片であり、搬入品と思われる。9は複合口縁壺の破片であり、上

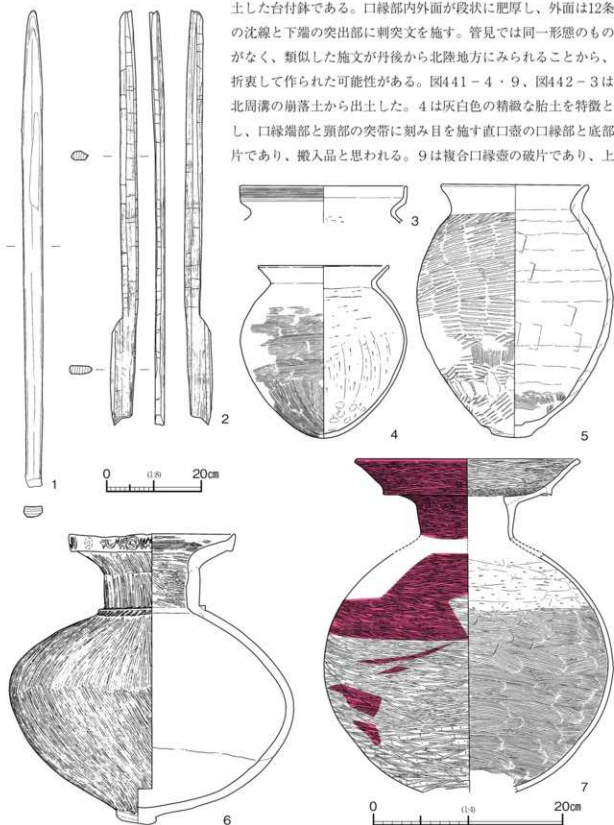


図442 44号墳 出土遺物(3)

方にのびる口縁外面に波状文、頸部の突帯に刻み目を施す。中部地方の影響によるものと思われる。図442-3は直立する口縁部の外面に数条の沈線を巡らす。胎土も異質のため、吉備地方から搬入されたものと考ええる。図442-7は西周溝から出土した二重口縁壺である。外面上半全体と下半の一部にベンガラが付着する。図442-1・2は東周溝においてみつかった木質遺物である。いずれもスギ材を使用し、1は片方の先端部を失らせ、2は割材の表面に削り痕が明瞭に残る。他の墳墓と同様、墳丘上での祭祀に使用したものであろうか。このように出土した遺物は多岐に亘る。この中で注目する遺物は、周溝内から出土した残りの非常に良好な、図440-7、図441-1・2である。また、供献土器としては図442-7も無視できない。これらから、44号墳の築造時期は庄内式期末から布留式期最古段階頃と推測する。

土壌化層の掘削中に大量の土器が出土する地区があり、1カ所に集中する集積遺構とも異なることから、低墳丘墓の存在した可能性があるものとして、包含層資料とは分けて紹介を行うことにする。1つ目は調査区北西部に位置する9号墳の北側一帯であり、庄内式期古段階頃の髙杯等がまとも出土した(図443-1~4、図版449)。2つ目は調査区中央の南側に位置する55号墳の南側一帯である。庄内式期新段階のものと考えられる小型の複合口縁壺や丸底の短頸壺、庄内式甕等がまとも出土した(図443-5~10、図版449・450)。おそらく03019落込を形成する要因となった氾濫により、墳丘を削平されたのであろう。本来、同落込部分には数基の墳墓が存在したものと思われ、それに関連すると思われる遺物も細片が多数出土している。

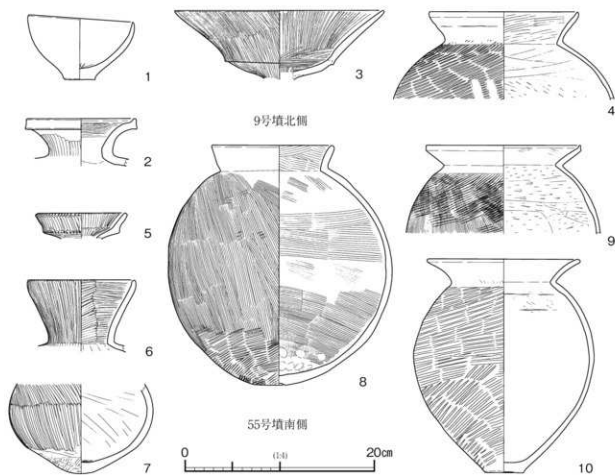


図443 9号墳北側・55号墳南側 出土遺物



図 444 調査区東 周辺遺構 平面

第5-2面における墳墓以外の遺構については、ほとんどが調査区の東側に集中する(図216)。調査区の中央よりやや東側に位置する南北方向の溝を境に、その東西で遺構の分布に大きな差が認められる。多数の墳墓群を検出した調査区の西部に対し、北東部の墳墓群を除く東部では、低地部は水田域、微高地上は畝間溝を中心とする耕地が展開される。これらは下面における遺構の分布状況とほとんど差がなく、継続した土地利用が行われたことを示す。

第5-1層を除去して現れた墳墓を検出した地区については、実際には墳丘の下面に第5-2層が残存するものの、上面で停止した状態となっている。墳丘下面の所見から、同層を旧地表とする第5-2面が厳密には複数に分化することは明らかであるものの、それらを整合することは不可能なことから、第5-1層除去面と同義の第5-2面の最終景観と、第5-2層除去面の2つの遺構面に分類することにした。概要にも示したとおり、実際の第5-2層上面では、墳墓群の領域内において墳墓と耕地が並行した期間や、さらに下面とした堅穴建物とも共存した可能性が考えられる。それらを具体的な景観として図示することは困難であるため、遺構の上下関係から全体的な傾向を表したものが第5-2b面や第5-2面であることは既述のとおりである。

調査区東部の中央付近、全体平面図における空白部分が水田の行われた低地部である(図216)。植物珪酸体分析の結果、当地区における第5層の細分層では、いずれも継続して水田耕作を行っていたことがわかった。明確な水田遺構を検出できないのは、当地の耕土層が薄層のため、上層の水田耕作に伴う攪拌により削平されたか、複数遺構面に亘って同じ位置に畦畔を踏襲したために区別できないものと考えられる。この低地部内の南西において、数条の畝間溝を検出した(図444)。上面からの耕作による攪拌のため、正確な範囲を明示できないものの、水田面より10~20cmとわずかに高い微地形が存在する。この範囲だけは水田化を行わず、畑地として利用したようである。

05313土器集積は、上記の畝間溝の間から検出された(図444)。直径約1mの狭い範囲に土器がまとまって出土した(図版149-1)。平面図では土坑状に表現するが、明確な掘形等の検出は認められなかった。ほぼ原形の状態で圧砕された土器がほとんどであり、各個体の残存率が90%前後を示すことから、完形品を集積したものと推測する。耕作土の状況によっては、地中に埋没していた可能性もある。遺物には椀形高杯・小形器台・高杯・細頸直口壺・庄内形甕がみられる(図447、図版453~456)。1~8は椀形・有段・庄内系高杯と小形器台であり、いずれも横位の細かいミガキ調整を多用し、杯・受部内面に放射状の暗文、脚部に4ヶ所の円形透孔を施す点が共通する。9・10の細頸直口壺においても同様のミガキと暗文が認められ、非常に強い統一感がみられる。9の体部下半にみる孔は、調査による傷ではないが、不定形で時代観がないことから、穿孔と判断しなかった。11~16は庄内形甕であり、出土した甕には他の型が一切含まれていない点も特徴的である。

低地部西側の微高地上では、南北にのびる落込や溝と畝間溝群を検出した(図444、図版78-1)。下面の遺構分布と基本的には同様であるが、部分的に変化が認められる。畝間溝群は05308溝と05100溝の間と東側にみられる(図版150-1)。いずれも東西方向を呈し、ほぼ等間隔に整然と配置されている。05100溝の東側は微高地の緩斜面にあたり、耕地化を行うことにより、狭小地を有効利用したものと推測する。

05100溝は、微高地東端の肩口を南北にのびる溝である(図444)。同溝の平面は下面からほとんど変化がみられないものの、断面によると、第5-2層相当の埋土が厚く堆積し、埋積の進行による溝底の上昇が認められる(図190・191)。埋土から若干の遺物が出土している(図450、図版343・448

・450)。1はスギの割材を棒状に加工し、上端に段をつけて細く削り出し、その中央に目釘穴と端部に細い溝を刻む。着柄と推測するが、下端を欠損し、全形は不明である。2・3は第V様式形甕であり、3の体部下半には焼成後の穿孔がみられる。4は加飾を行う直口壺である。

05100溝の南側、調査区南部を東西に広がる微高地上に05101・05378溝を検出した(図445)。

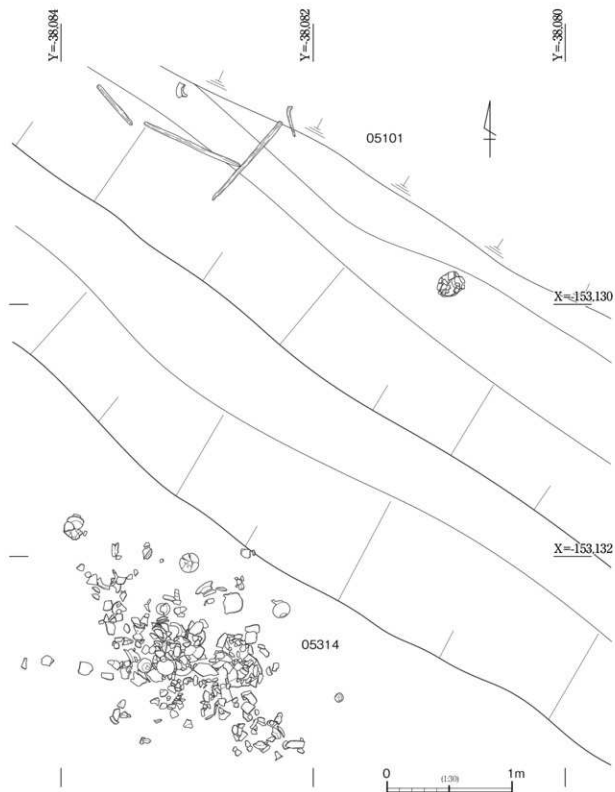


図446 05101溝・05314土器集積 遺物出土状況

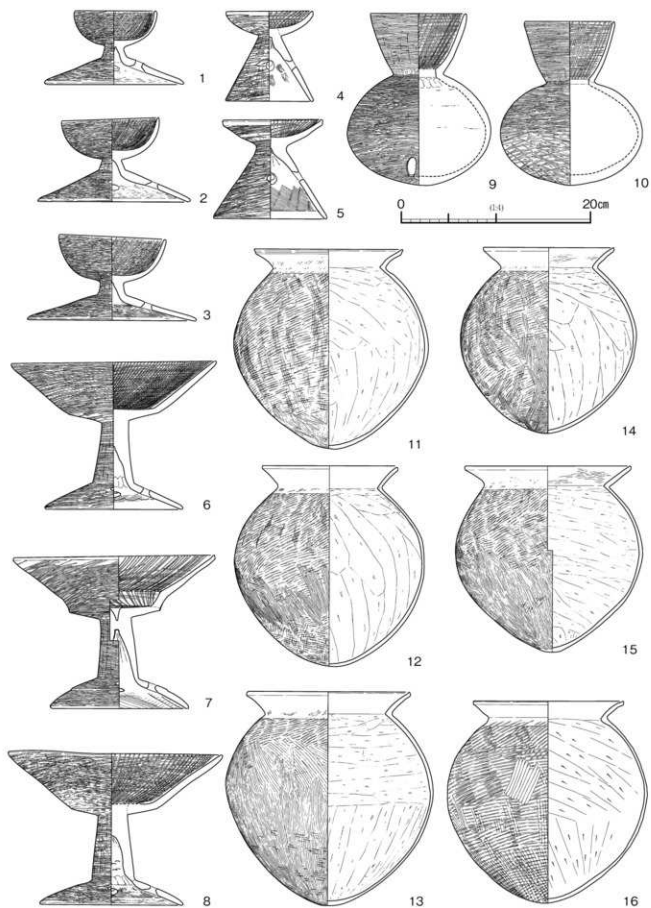


图 447 05313 土器集積 出土遺物

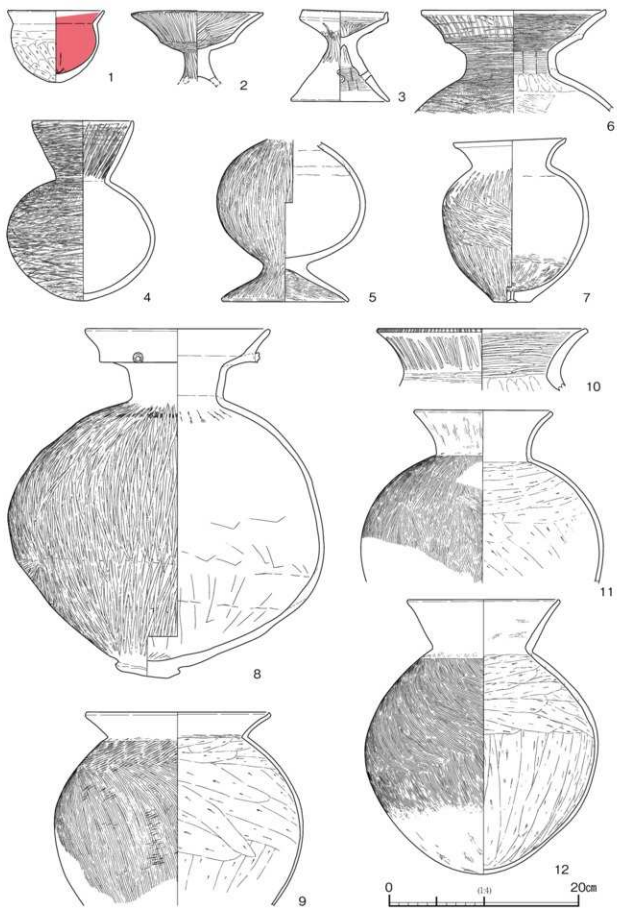


圖 448 05314 土器集積 出土遺物

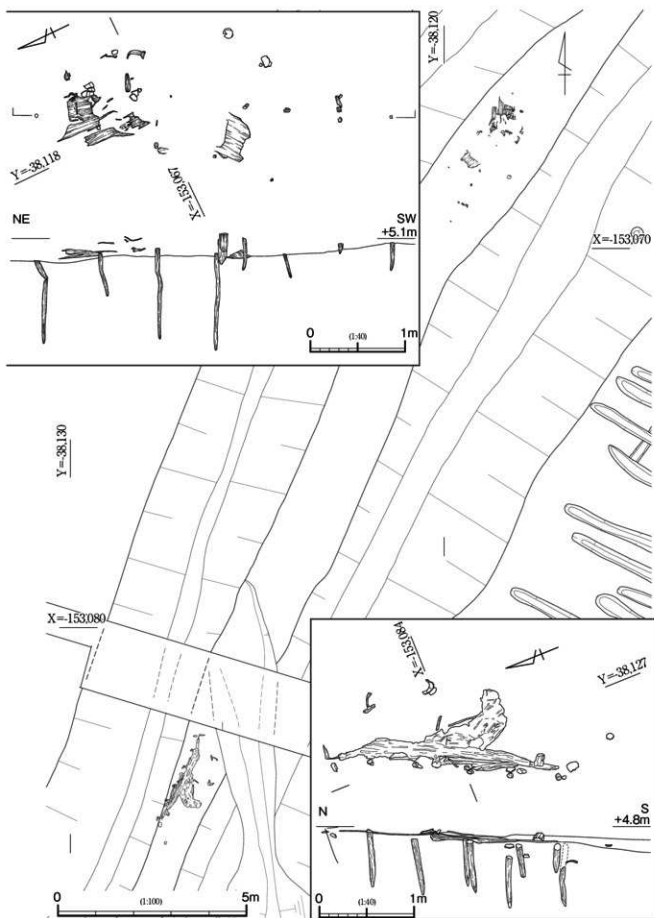


图 449 調査区東・中央 周辺遺構平面

05101溝は05100溝の東側を南西方向にのびる溝である（図445、図版78-1）。下面より継続する溝であるが、本遺構面では同一位置において再掘削され、排土を肩部に盛り上げ、断面V字状を呈する幅1m前後の細くて深い溝へと変化する（図445、図版147）。

05378溝は、05100溝西側の05101溝延長上に位置し、05308溝に接続する（図445、図版78-1）。本遺構面において新たに開削された溝であり、遺構底面の標高は低いものの、05101溝と同様に断面V字状を呈する。05308溝との接続部分では、本溝の両肩に複数の割材が打ち込まれた跡を検出した（図版147-4）。05101溝と一連の溝である可能性を考えられるが、同時期に05100溝が機能することは明らかであり、同溝を跨いで水利を行う方法には不明な点が多い。05100溝より両溝底が低いことは明らかであることから、05100溝を中心に考え、各溝に別名称を設定した。

05314土器集積は、05101溝南側の微高地上に検出した（図445）。05313と同様の耕地内に位置するが、出土範囲が約3mと広く、当初から欠損した土器も多く見受けられる（図446、図版149-2）。遺物には小形品・高杯・壺・甕等がみられ、様々なものが混在する状況も05313と異なる点である（図448、図版456-458）。1は内面全体に赤色顔料の付着がみられる小形丸底鉢である（原色図版13）。2は庄内式期古段階の有稜高杯である。3は庄内式期新段階の小形器台である。5は口縁部を欠損する台付壺である。6は横位の細かいミガキを多用する複合口縁壺である。7は底部に径約3mmの小孔を焼成前に穿つ広口壺である。8は口縁に竹管円形浮文、肩部に柳描波状文を施す複合口縁壺である。10は口縁端部に刻み目を施す広口壺である。

05308溝は下面より続く05006落込の東側に位置する（図444、図版146）。元々は05006落込であった凹みの東側を開削したものであり、幅3.0m前後、深さ約1.5mを測る。溝の底面からは開削時の鋤によるものと思われる工具痕を検出した（図版146-3）。05308溝の開削時は底面の標高が05378溝と同一であり、隣接する05006落込よりも低位であることから、排水流路として機能したものと考え

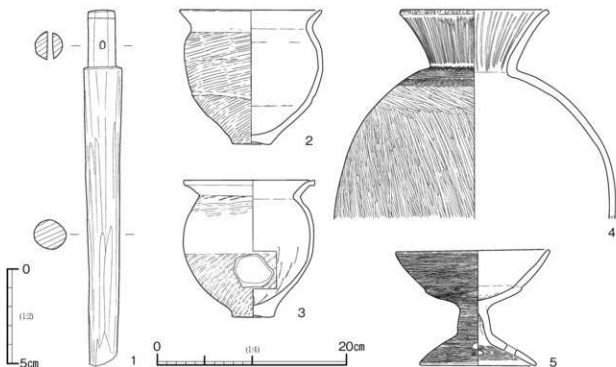


図450 05100溝 出土遺物

る(図136)。前述の接続部分の杭列は、05378溝への逆流を防止するための柵であったと推測される。遺物は溝内埋土から出土し、小形品・鉢・高杯・甕が含まれる(図452-5~9、図版452)。5はミニチュアの鉢であり、内面に褐色・赤褐色(赤色顔料か)の付着がみられる。6は台裾部が上方に反る台付鉢である。8の高杯、9の甕は庄内式期新段階のものである。

05308溝と西側の05006落込との間では杭列や敷葉を伴う盛土等を検出した(図449、図版145)。埋土である砂の上から杭を打設し、間に敷葉を挟んで盛土を行っている。05006落込は埋積による止水化が起っていたと思われ、05308溝を掘削した排土を利用して築堤や護岸を行うことにより、溝と落込の両者を活かそうとしたものと推測する(図135)。

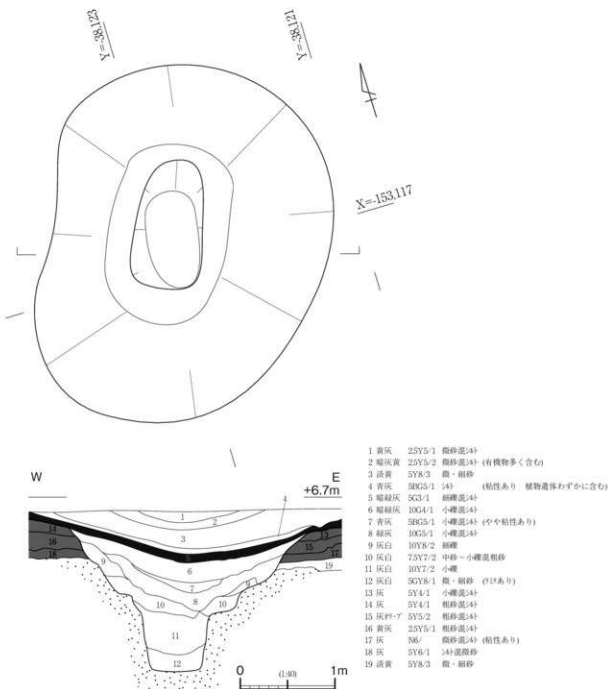


図451 05310土坑 平・断面

調査区南側の微高地には、基本的には下面から継続する耕地と考えられ、本遺構面においても東西方向の畝間溝群を検出した(図445、図版150-2)。ただし、05378溝の南側は若干状況が異なっており、耕作痕より後出する土坑や、落込・建物跡といった他の遺構が検出された(図445)。

05310土坑は畝間溝群の廃棄後に掘削された遺構である(図451、図版147-5)。平面は豆形を呈し、長径約3.8m、短径約2.9m、深さ約1.7mを測る。断面によると、上半約1mはすり鉢状に下降し、中央部に長径約1.35m、短径約75cmで段をなして鉛直に掘り込まれる。土坑底面はT.P.+4.9mを測る第8b層に達し、埋土には水成堆積がみられることから、井戸であった可能性は高い。遺構内部から遺物は出土しなかった。

05300落込は05310土坑の南東、05100溝の西側に検出した(図445)。平面図では土坑状を呈するが、実際には05100溝の肩口に段を形成したような状態である(図版161)。落込の内部に、土器がまどまってみつかった。遺物には小形器台・有段高杯・甕がある(図452-1~4、図版452・453)。小形器台・高杯はいずれも横位の細かいミガキを多用し、受部・杯部内面に放射状暗文を施す。甕はハケ調整の庄内形である。

05315竪穴建物は、 $X = -153.125$ 、 $Y = -38.136$ 付近に位置する(図445)。第5-1層の除去面において、炭化物の筋が方形に巡る状況を検出したものである。炭化物は家屋の構造物が焼失した燃え滓であることから、本来は面的に外側へと広がっていたものが第5-1層によって削平されたと推測さ

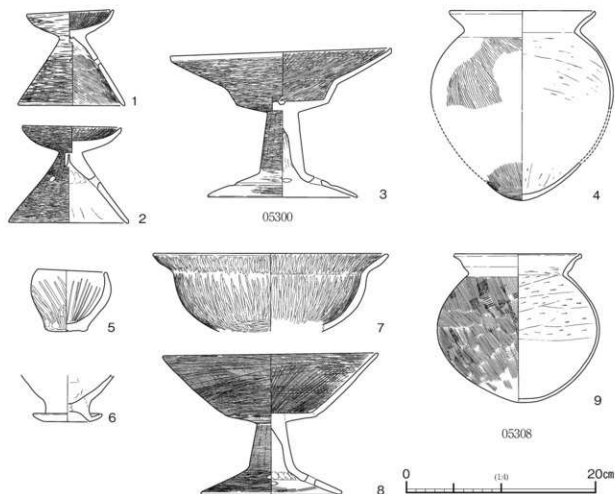


図452 05300落込・05308溝 出土遺物

れる。したがって、検出した範囲外にも何らかの構造が存在したことは確かである。建物は、05100・05378・05308溝に囲まれた狭小な微高地上のほぼ中央に位置する。遺構の南側は、トレンチ調査のために攪乱され、全体の形状は不明であるが、平面は隅丸長方形を呈する。検出状態における規模は、長辺の残存部分が3.7～3.9m、短辺が3.2～3.3mである。断面は逆台形を呈し、深さ約30cmを測る。

埋土の上部1層を除去すると、凹みの内側全体に堆積する大量の炭化物を検出した(図版148-1)。出土状況から、建物の上屋構造が火災によって崩落したものであると判断する。炭化物は、掘形の法面周辺である両側において良好に残存し、掘形の中央付近ではあまり塊の残存はみられない(図453)。形状を認識できる炭化物については、面的に広がって樹皮状にみえるものと、細くて厚みのある丸太状のもの2種類に分けることが可能である。断面によると、樹皮状の炭化物の大半は丸太状のものの上

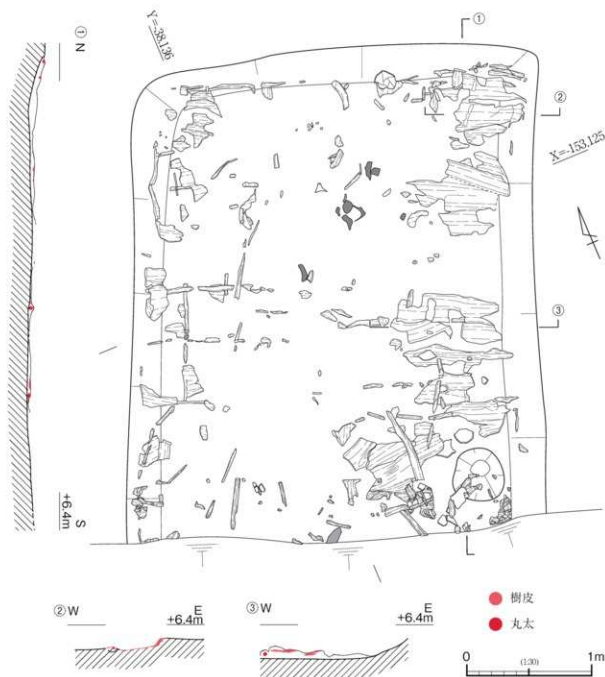


図453 05315竪穴建物 炭化材(検出)出土状況・断面

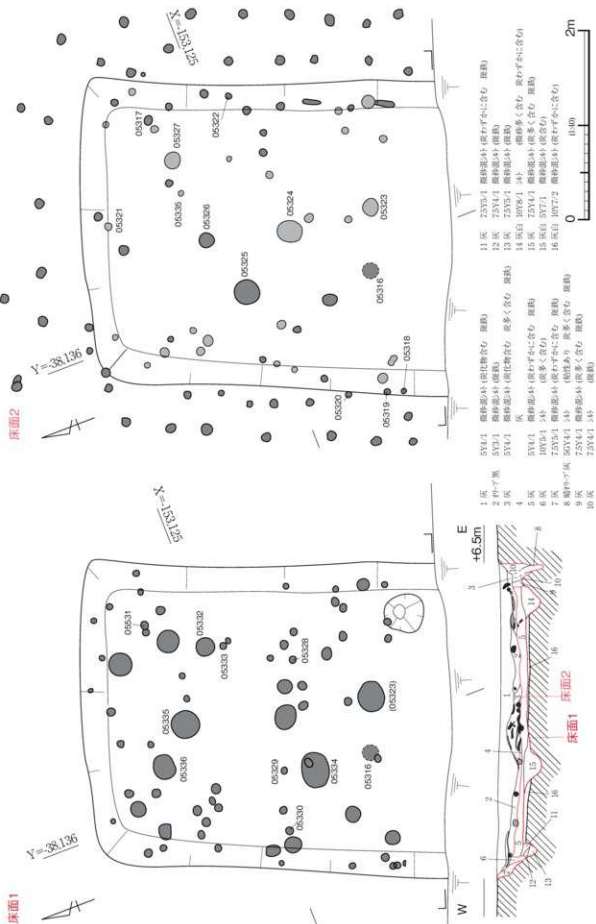


図 454 05315 竪穴建物 床面検出遺構 平・断面

に位置することが多いことから、樹皮状は屋根材、丸太状は柱や梁材に相当すると考える。建物の東西長辺に位置する樹皮状炭化物の繊維の方向が、短辺の方向に並行する状況を確認した。一方、北側の短辺では直交するものがわずかにみられることから、本建物の屋根は切妻屋根に限りなく近い寄棟屋根であったと推測する。丸太状炭化物は断片的にしか残存しないものの、建物南側では放射状に並ぶ状況が看取される。その他には、東側長辺から約80cm、西側長辺から約40cmと約80cm、それぞれ内側の位置に、丸太状炭化物を長辺方向に並行して検出した。丸太状炭化物はいずれも太さが3～4cmを測り、収縮率を加味しても、10cm以上となるような大型の材は見当たらない。主柱が存在したのかどうかは不明であるものの、基本的には上記程度の丸太材を使用して上屋構造を構築したものと推測する。

本竪穴建物では、上記の炭化物を含む埋土を除去した面を床面2、埋土の最下層（層16）を残した最古面を床面1とする（図454、図版148-2）。断面によると、上部の床面2は掘形の中位付近に位置し、両側の法面下端に幅10～20cmの掘り込みが確認される。下部の床面1では掘形底面上に1層検出し、床面を整地した際の貼り床土と考えられる。また、両側の法面下端には幅15～30cm、深さ約15cmの掘り込みが認められる。いずれも平面形の記録がないものの、状況的には壁溝が存在したものと推測する。

各床面の状況としては、床面1・2のいずれにおいても、多数の小穴を検出した（図454）。上部の床面2では掘形の外周部分に検出した小穴群を図示したが、これらは必ずしも同床面に対応するものではないと考えられる。遺構検出時の分布図のみで下端の位置が不明であるため、小穴はすべて塗り潰しにより表現する。また、床面1・2に共通する小穴については、床面2のものを薄く表現する。図上に遺構名を記したのものについては断面の観察を行っており、埋土は炭化物を含む微砂混シルトで、深さが5cm程度と非常に浅いことがわかった。また、各床面とも柱穴となりうる組合せが見受けられないことから、上屋構造は地表面上に直接骨組みを設置する小屋状のものであった可能性も考慮しなければならぬ。いずれの床面においても知跡等は検出されなかった。

遺物は、主に炭化物を包含する埋土から出土した。しかし、出土した大半が細片であるため、図化に至ったものは非常に少ない。遺物は、土器に飯蛸壺・小形器台・庄内形甕・直口壺・高杯等がみられ、他に棒状土錘・摺石等が挙げられる（図455-2～7、図版457・458）。5は05323小穴から出土した安山岩製の摺石であり、表面に摺打痕もみられる。7は絹雲母千枚岩の用途不明品であるが、人為的に持ち込まれたものと思われる。

05006落込より西側の微高地上では、基本的に墳墓以外の遺構がほとんどみられない点は既述のとおり

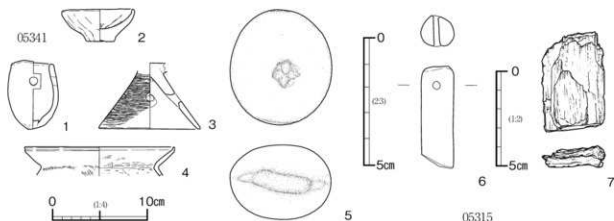


図455 05315竪穴建物・05341土坑 出土遺物

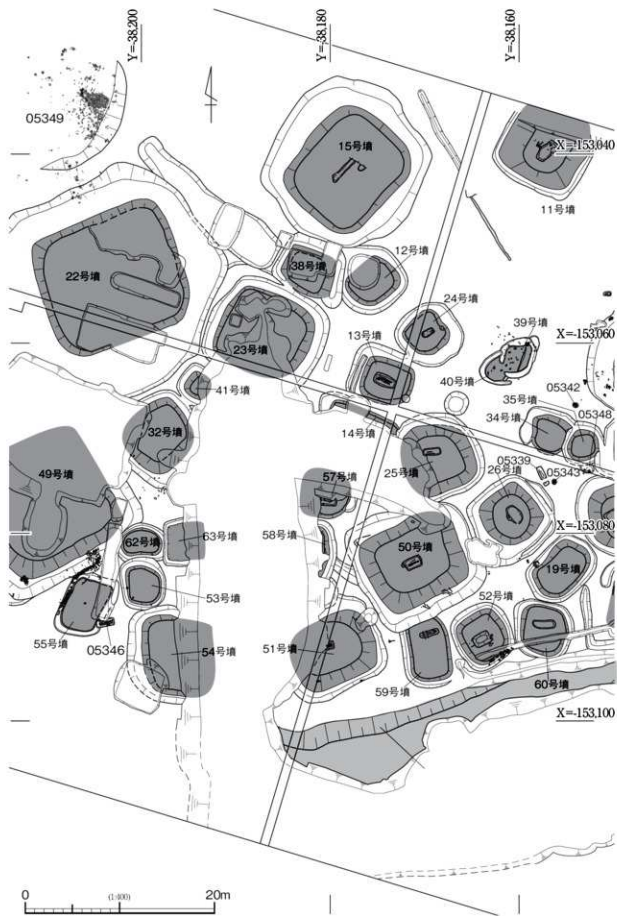


图 456 调查区中央 周边遗槽平面

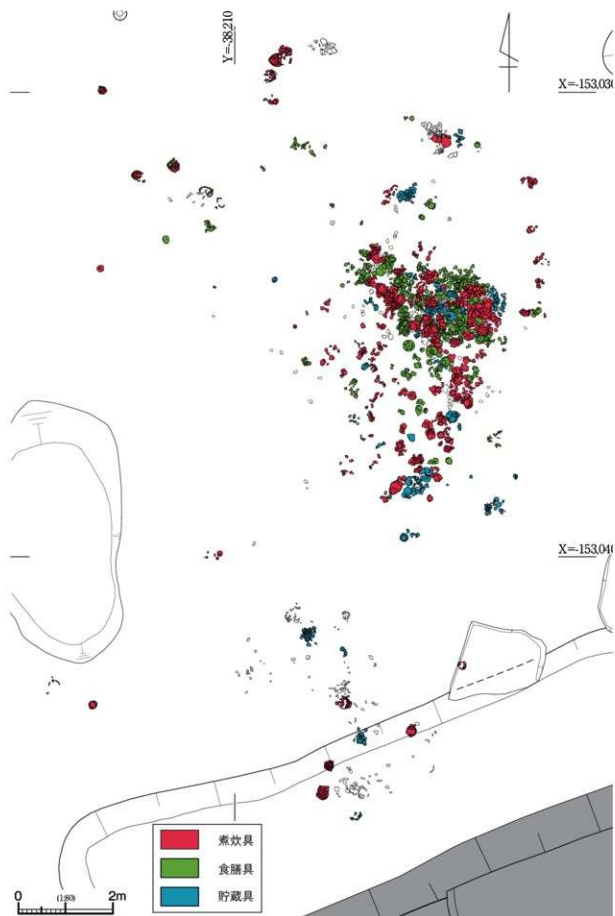


圖 457 05349 土器集積 遺物出土狀況